海外在住日本人母親のコミュニケーション行動：アメリカ合衆国サンディエゴの場合[1)]

南　保輔

0. はじめに

本論文では、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンディエゴに在住する日本人母親のコミュニケーション行動についての調査結果を報告する。筆者は、1990年春から1年半、サンディエゴ日本語補習授業校「みなと学園」に学ぶ子供たちの海外経験および帰国経験を調査した（Minami 1993；1995）。その際、学校での観察や先生・児童とのインタビューに加え、保護者（大半は母親）とのインタビューも行った。母親とのインタビューでは、子供たちの様子を詳しくたずねるとともに、母親自身の生活や関心についての情報も収集した。そのなかで、母親のメディア使用や対人的コミュニケーション行動についての質問もなされた。

本研究は、基本的に、質的研究である。サンディエゴという異文化状況での日本人母親のコミュニケーション行動を記述的・分析的に報告することを第一目的としている。なんらかの因果関係についての仮説命題を検証するということは本稿の範囲内では行わないが、そのような関心と無縁というわけではない。海外で生活する日本人の子供たちの社会化、とりわけ言語習得との関係を明らかにしたいという大きな問題意識を秘めている。

Minami（1993；1995）は、日本人の子供がアメリカ文化になじんでいく[2]過程に影響をおよぼす要因のうち大きなものとして、渡米時の年齢、滞米期間、滞米中の生活形態という3つをあげた。異文化化における発達的要因の重要性を指摘したものとしては、Minoura（1979）；箕浦（1984；1990）がある。「意味空間が体得される最も重要な時期は、9歳から15歳までの6年間」（箕浦1990：88）であるという知見は、渡米時の年齢と滞米期間との2つの要因の重要性を指摘している。

これら3つのうちもっとも複雑なのが、滞米中の生活形態という要因である。もっとも簡単な例として子供の就学形態を考えてみよう。海外在住の日本人の子供は、全日制の日本人学校に通うか、あるいは、平日は現地の学校に通いながら週末には補習授業校で日本語を学ぶか、のどちらかであることが多い。1990年5月の調査では、海外在住の義務教育年齢児童・生徒49,336人中、日本人学校在籍者は37%にあたる18,301人であるのに対し、補習授業校在籍者は43.2%の21,313人である（文部省 1991：4）[3]。

サンディエゴには全日制の日本人学校がないため、筆者の知っている子供たちの全員が現地校と補習授業校との「二重生活」組であるが、かつては、父親がサンディエゴにあるオフィスの駐在員でありながら、ロサンジェルス郊外に居住し、子供を全日制のロサンジェルス国際学園に通わせた家族もあった。父親は毎日片道1時間半かけてサンディエゴまで通勤していたという。

このように、全日制の日本人学校に通っている子供と、平日は現地の学校で「アメリカ人」の子供と机を並べてアメリカのカリキュラムに基づき英語で学んでいる子供とでは、異文化化（ここでは「アメリカ化」）の形態や速度が異なるのは明らかだろう。滞米中の生活には、もっと微妙なレベルでの差異も含めいろんなバリエーションがある。母親たちのコミュニケーション行動もその一つである。

海外在住日本人の生活については、体験者による体験談的なものは数多く見られるが（たとえば、ムトー 1985；篠田 1984）、現在までのところ、体系的な研究はほとんどないといってよい。わずかに、京都大学教育学部比較教育学研究室（1979）によるマニラとシンガポールでの調査と江淵らによるマレーシアとタイでの調査（江淵1980を参照）とが目につくぐらいである。

また、海外在住者に限らずとも、家庭の主婦／母親の生活とコミュニケーション行動を体系的・包括的に研究したものも少ない。たとえば、『女性とメディア』（加藤他編 1992）というタイトルのアンソロジーもあるが、これは女性制作者／送り手の視点からの論文集である。本研究は、生活者あるいは受け手の立場にある母親たちのコミュニケーション行動を生態学的に解明することをめざすものである。

1. コミュニケーション行動研究のための理論的背景：メディア使用と対人的コミュニケーション

あるコミュニティに生活する人々の包括的・生態学的研究というと、まず思いうかぶのは文化人類学者によるエスノグラフィーである。日本の女性を扱ったものとしては、『須恵村の女たち：暮らしの民俗誌』（Smith & Wiswell 1982 = 1987）がある。これは、ジョン・エンブリーの『須恵村』調査（Embree 1939）に同行した夫人エラ・エンブリーの日録を中心に、調査の40数年後にエラがロバート・スミスの助けを得て出版したものである[4]。どちらかといえば『須恵村』が「公認の政策」を反映した「タテマエ」的側面をあつかっているのに対して、『須恵村の女たち』はより鋭く「ホンネ」・生態に迫っている。本稿で取り扱うデータは、エンブリーたちのような人類学的参与観察法によって得られたものではないが、生活に直接に迫ろうという姿勢は相通じるものがあると信じている。

本研究では、インタビュー法により母親たちからデータを収集したが、インタビュアーである筆者の設問に自由に回答してもらった。インタビュー中はメモも取ったが、分析は録音テープを中心になされた。本稿では、関連部分のトランスクリプトを付表として掲載し、それに適宜言及しながら分析を進める。データをできるだけ明示するとともに、人びとの生態をできるだけ忠実に伝えるという目的にもかなうものであると考える（方法論について詳しくは、南 1995a；1995b を参照のこと）。

本稿の主題は、「コミュニケーション行動」である。まず、コミュニケーション行動の定義を示す必要があるが、筆者は現在満足できるものを用意できていない。そのため、迂遠ではあるが、類似の概念である「情報行動」論の批判的検討から始めることにしたい。

情報行動を定義したものとしては、北村（1970）；加藤（1972）；中野（1980）などがあるが、三上（1991）はこれらをふまえて彼自身の定義を提示している。それによると、情報行動とは、「個人がある社会システムの中で、メディアを介して、あるいは直接的に情報を収集、伝達、蓄積、あるいは処理する行為」

である（三上 1991：27 - 28）[5]。

結論からいうと、本稿では「情報行動」という問題の立て方はしない。その理由の第一は、対面関係をも含めて取り扱いたいからである。筆者の枠組みでは、「情報」概念は、現在のところ、対面的な相互作用における発話を含むところまでは拡張されていない。人間の認知能力にささえられた関係全般をさす概念として「コミュニケーション」という言葉を使う理由である。辻村（1968）は、通信と交通とをともに含む上位概念としてコミュニケーションを定義しているが、本稿はこれを参考にしている。

そもそも、「メディア」とは「媒体」の意味であるが、たとえば、人間の話す言葉も「メディア」である。ビゴツキーに学ぶマイケル・コールたちは、人間の心理活動のほとんどすべてが、言語というメディアに媒介された行動であるという立場を主張する。筆者はこの立場に共感し、人間存在の根幹に「メディア現象」があると考えている。筆者の「コミュニケーション」概念へのこだわりもこれと無縁ではない[6]。

三上（1991：26 - 27）は、「外国では情報行動ということばはあまり使われず、むしろコミュニケーション行為とかメディア利用行動などといった概念の方がポピュラーである」と述べているが、なぜ日本で「情報行動」という言葉が好んで使われるかは論じていない。ただし、三上が言及しているうちの一人である加藤（1972）は、情報を、広く「環境からの刺激」と定義している。「経験」は、「情報」あるいは「情報行動」であると捉えるのである（加藤 1972：44）。また、吉田（1990：3）は、広義の情報を「意味をもつ記号の集合」と定義する。ここまで情報を広く考える立場は、認知科学の分野では主流となりつつあるようだが（Vera & Simon 1993；1995）、マスコミュニケーション研究者の間ではまだ少数派のようである。

「情報行動」を「メディア使用行動」の意味で、「コミュニケーション行動」の下位概念として扱う方法もある。あるいは、「コミュニケーション」を「情報行動」の一部をなすものとして考えるやり方もあろう（たとえば、三上 1991：31）。しかし、本稿では、メディア使用行動と対面的な相互作用とを含む上位概念として、コミュニケーション行動を考える。具体的には、サンディ

エゴに住む日本人母親のマスメディア使用と交友関係とを分析していく。

マスコミュニケーション研究者たちは、「情報行動」が生起する空間をさす言葉として「情報環境」(水野 1990；中野 1980)、「マスメディア環境」(田所 1974)、「メディア風景」(Rosengren 1994a) などを使っている[7]。たとえば、中野 (1980) は、「生活空間は社会的媒体空間のネットワークの中にあるが、生活空間からみると、社会的媒体空間はひとつの環境として示される」といい、これを「情報環境」と呼ぶ。しかし、これら一連の研究は、Boorstin (1962=1964) を意識して、「リアル (現実)」と「疑似環境」の違いに照準する議論が多く (たとえば、川本 1990)、メディアのインパクトを論じるのには効果を発揮しそうであるが、メディア使用の生態学的研究にはあまり有効とは思われない。

メディア使用についても、「メディア接触」や「メディア消費」などの類似概念がある。いずれもマスメディアのメッセージへの接触・使用を含意しているが、その力点が少しずつ異なるようである。「メディア消費」はマスメディア情報の商品としての側面に照準しているのに対して、「メディア接触」は受け手の主体性への関心があまり感じられない。本稿では、海外在住日本人の日本語メディアへの渇望に基盤をおくメディア接触やメディア利用を論じるのに、「メディア使用」という言葉を使うことにする。

2. サンディエゴにおける日本語を中心としたメディア構造

コミュニケーション行動、あるいはメディア使用について論じる前に、その生起する空間を紹介しておく必要がある。ここでは、この空間をさすものとして「メディア構造」という言葉を使う。メディア構造 (media structure) とは、ある社会におけるメディア、とりわけマスメディアの発達や普及を指す概念である。テレビ放送の開始、ケーブルテレビの普及、VTRの発明などはメディア構造上の出来事と考えることができる。

ある地域のメディア構造を規定するものとしては、テクノロジーの発達と、その応用・普及の二つを分けて考える必要がある。テレビ放送技術の発明とい

うのは前者の例だが、ある地域でテレビ視聴が可能となるかどうかは、テクノロジーの応用・普及の問題であり、技術的な要因に加えて、社会・文化的要因が関与するところが大きい。たとえば、テレビはアメリカ社会に十分に浸透しているが、サンディエゴで日本語のテレビ放送が視聴可能となったのは、ケーブルテレビがそれを放映するようになったつい最近のことである。日本語人口が増加し、日本語放送の需要が高まり、ケーブルテレビ会社がそれに応えた結果、サンディエゴのメディア構造に日本語テレビが加わったのである。

技術の普及の問題は、生活者の側から見ればアクセスの問題である。選択に際してどのようなサービスが提供されているのかが、まず論点となる。本節では、サンディエゴのメディア構造を、日本語のものを中心に概観する。英語のものは、日本人に関係が深いと思われるもののみを取り上げる。

サンディエゴは、アメリカ合衆国の西海岸最南端に位置し、メキシコと国境を接する町である。サンディエゴ市の人口は、1990年現在111万人で全米第6位であるが、地域の人口としてはそれほど多くはない。サンディエゴ大都市統計地区は人口250万人で、全米第15 位にすぎない。サンディエゴには太平洋艦隊第8艦隊の母港がおかれ、海兵隊の基地もあり、軍需産業が発達している。

サンディエゴに暮らす日本人といっても、その滞米形態はさまざまである。まず、戦前に移住した日系人の子孫、「新一世」と呼ばれる戦後の移住組、国際結婚をしている人たちがいる。これらの人たちは、アメリカ合衆国の国籍(市民権)、あるいは永住権（グリーンカード）を保持している。対して、一時的な在留資格で滞在する者に、日本企業の現地法人（「子会社」）の駐在員、研究者や留学生などがいる。みなと学園に子供を通学させている家庭には後者が多いが、「永住組」と呼ばれる前者も少なくない[8]。

サンディエゴには、1970年代前半、日本の電機メーカー2社が進出し、製造工場を建てた。1970年代後半にはメキシコ政府のマキラドーラ（保税加工工場制度）により日本メーカーの進出が相次いだ[9]。工場をメキシコ側に置いた場合でも、事務所および駐在員の生活はアメリカ側という形態が取られた。このような状況で、地域の日本人児童・生徒数も増加し、1979年4月にみなと学園

は開校した。開校時は、小学1年生から中学2年生までに39人の児童・生徒が在籍していたが、1982年には高等部を開設し、1990年度は高校3年までの23学級に405人が在籍（5月1日現在）するまでとなった。なお、地域の日本人の人口は約1700人と言われている（『海外子女教育施設便覧　第2巻　補習授業校編』1990 による）。

1．新聞　サンディエゴにおける日本語マスメディアは、近年飛躍的に発達してきている。まず、日刊紙だが、朝日新聞が通信衛星を使用しての海外現地印刷をニューヨークで1986年10月、ロサンジェルスで1987年11月に開始した。読売新聞は、1977年7月からフィルム空輸によりニューヨークで現地印刷を行ってきたが、1986年9月よりロサンジェルスでの印刷も開始、同年10月からは通信衛星を使用しての印刷となった。この結果、ロサンジェルスでの購読料は、月額43ドルだったのがニューヨークと同じ36ドルとなった。なお、朝日新聞衛星版の方は月額78ドルとなった。それ以前は、日本からの空輸のため購読料も高く（99.8ドルから113ドル）、また配達までの時間もかかっていた[10]。

ロサンジェルスでの印刷が開始されてしばらくは、配達に時間がかかり、サンディエゴでは1日ないし2日遅れでしか読めなかったのだが、1990年からは即日配達網がサンディエゴまで拡張され、発行の当日に読めるようになった。このため、時差の関係で「明日のニュースが今日読める」といううたい文句がサンディエゴでも現実のものとなったのである。それまでは、ロサンジェルスで発行されている日系人向けの『羅府新報』を購読していた人が多かった。たとえば、母親Oが言っているように、朝日新聞がサンディエゴに即日配達されるようになったのは、1991年1月のこのインタビュー時点より1年ほど前のことであり（図1：O012 - O013）[11]、O家では、読み慣れている『羅府新報』を続けて購読している。朝日新聞を購読して社説を読ませるのが、子供の日本語教育のためには好ましいことだとはわかっているが（O018 - O020）、そうはしていないという負い目のようなものを感じていることもわかる。

また、企業によっては、職場を通じて日本の新聞を家庭まで送り届けていたところもあった。そうではなくとも、職場には日本から航空便で届けられてい

図1. 母親Oとのインタビュー　(1991年1月15日)

O001　南：あのう、新聞は、日本のものとか取ってらっしゃいますか。
O002　O：日本の、新聞です。
O003　南：あ、そうですか。朝日か、ま、読売か。
O004　O：いえ、羅府新報です。
O005　南：はーあ。ほーう。
O006　O：もうずっと、こっちきてからずっとそれなもんですからね。
O007　南：ほーう。それは、やっぱり、LAから取り寄せてもらうんですか。
O008　O：送ってくるんです。
O009　南：宅配もあるんですか。結局、郵便ですか。
O010　O：宅配で、はい、郵便で。
O011　南：ああ、そうですか、ほーう。
O012　O：だから、あの、朝日とかできたのはまだ1年なりませんよね。1年たってな
O013　　いですよね。
O014　南：そうですよね、はい、はい。
O015　O：だから、その前は、もうずっと羅府新報で。それで、もう、羅府新報であ
O016　　る程度の、ニュースが、わたしたち、キープできるんですよね。それで、
O017　　ロスとか、そしてアメリカのことを、ある程度知れますのでね。だから、
O018　　朝日とかあんなん取ったら、まだ、子供のためにはいいんですけどね。だ
O019　　から、そういう問題の、社説を読ませたりすることもしないととは思って
O020　　るんですけどね。
O021　南：はあ、ほう。現地のものも取ってらっしゃいますか。
O022　O：いえ、取ってません。

たわけで、それを後日各家庭で回し読みするというところは多かった。なお、筆者が調査を行った1991年3月の時点で、北アメリカでの現地印刷をしていたのは、朝日新聞、読売新聞、日本経済新聞の3紙である。

英語の日刊紙は、サンディエゴ地区では、朝刊紙のサンディエゴユニオンとロサンジェルスタイムズ、夕刊紙のサンディエゴトリビューンという地方紙に加えて、USAトゥデイやニューヨークタイムズ、ウォールストリートジャーナルなどが購読できたが、後に見るように、日本人家庭で定期購読されているのはサンディエゴユニオンが多かった。

2. テレビ　ロサンジェルスの国際放送局KSCIで、月曜日から金曜日までの朝と、土曜日・日曜日・月曜日の夜の時間帯に日本語のテレビ番組が放映されていた[12]。月曜日から金曜日までの午前6時30分から7時30分までの1時間はニュースで、フジテレビの海外版『スーパータイム』である[13]。土曜日・日曜日・月曜日の夜は、娯楽番組が中心となっている（詳細は表1参照）。ただ、サンディエゴの新しい住宅地域では屋外にテレビアンテナをたてることが禁じられており、そのためかケーブルテレビへの依存度が高い。屋内アンテナでは、サンディエゴではKSCIの受信状態は悪くケーブルに頼らざるを得ないが、ケーブルはチャンネル数に制限がありKSCIを放送するかどうかは、各ケーブルテレビ会社の判断による。筆者が調査を行った1991年春の時点では、サンディエゴ地区の全域でケーブルによりKSCIの日本語放送が視聴可能となっていたが、南部地区では視聴可能となったのがつい最近の出来事という地域もあった。

ケーブルテレビについては、少し詳しく紹介しておきたい。各家庭は、居住地区で営業しているケーブルテレビ会社と契約して受信するということになる[14]。サンディエゴ地区のケーブル会社の場合、契約の種類は、視聴可能なチャンネ

表1. KSCIの日本語放送一週間の番組（朝のニュースを除く）
（『朝日新聞』米州版 1991年1月23日20面より）

土曜日	
20:00	ニュースウィークリー
20:30	愛されていますかお父さん（ドラマ）
21:30	演歌の花道
22:00	そこが知りたい
23:00	新婚さんいらっしゃい！
日曜日	
20:00	新世界紀行
21:00	東芝日曜劇場
22:00	ジャパンニュースマガジン
月曜日	
22:00	大森実の国際情報
22:20	教育シリーズ

ル別に3種類に分けられる。まず第一は「ベーシックサービス」と呼ばれるもので、その地域でアンテナを使用して受信することができる放送局（チャンネル）の再放送をするものである。普通は、4大ネットワークであるABC・CBS・NBC・FOXに、NHK教育テレビに類似した番組編成のPBSと独立系の地方局数局を加えた約10チャンネルで、料金は月額10ドル前後である。次に「スタンダードサービス」と呼ばれる契約形態がある。これは、「ベーシックサービス」にケーブルテレビ専用のチャンネルを加えたものであり、あわせて約30チャンネルが視聴できる。ケーブルテレビ専用のチャンネルには、24時間ニュースとして有名なCNN、スポーツのESPN、子供むけのNickelodeon、アトランタのTBS・シカゴのWGN・ニューヨークのWORなどの「スーパーステーション」などがある。KSCIも、サンディエゴではスタンダードサービスで視聴できるチャンネルの一つである。毎月の料金は20数ドルである。

これに、ペイケーブルが加わる。HBOなどのプレミアムチャンネルは、チャンネルごとの契約であり、1チャンネルにつき月額5ドル前後かかる。Showtime・Cinemax・Movie Channel・Bravoの他、ディズニーチャンネルもチャンネル別契約である。月ぎめ契約のプレミアムチャンネルの他に、1回視聴ごとの契約（pay-per-view）もある。これは、1番組ごとに事前にケーブル会社に申し込むのだが、ボクシングのタイトルマッチなどは、1回30ドルも払わなければ見られなかったりする。

3. その他　新聞とテレビ以外の日本語メディアというと、書籍がある。サンディエゴ地区にも日本語書店があるが、品揃えは薄く、片道2時間ほどかけてロサンジェルスの大書店まで買い物がてら出かける人も多い[15]。あるいは、日本にいる親戚から送ってもらうことになる。ある日本企業では、海外赴任者へのサービスの一環として、家族全員に雑誌を1冊ずつ日本から定期的に送付するところもある。また、みなと学園では、PTAが図書館を運営しており、児童・生徒用の書籍の他に、大人用の本も揃えられている。送迎のついでに利用する保護者も少なくない（たとえば、付図N：N187 - N188参照）。

忘れてはならないのが、ビデオである。1990年度のVTRの家庭への普及率は、

日本で80%、アメリカで70%であるが（戸村 1991b)、筆者の調査対象であるサンディエゴの日本人家庭では、その普及率はほとんど100%と推定される。というのは、ビデオは大人の娯楽としてのみならず、子供の日本語教育にも必須とみなされているからである。小さな子供のいる家庭では、日本から子供向け番組を録画して定期的に送ってもらっているところも多い（たとえば、付図S：S112 - S131 参照)。後に詳しく検討するが、日本語のビデオのために、逆に、わが子の英語習得が遅れていると考えている母親もいる（後掲図3 参照)。

大人向け番組のビデオも日本の知人から送られてきているが、多く利用されているのはビデオレンタルである。サンディエゴには、1987年の暮れに日本食料品店が開店したが、その一角にレンタルビデオのコーナーがあり、繁盛していた。1本1ドル程度だが、5本ぐらいまとめて借りるという人も少なくないようだ。

3. 日本人母親のメディア使用

本稿で報告するのは、21人の日本生まれの母親たちのコミュニケーション行動である。基本的に、滞米期間の短い母親から順にAからUまでケース番号をつけた（表2参照)。これらの母親は、子供をサンディエゴ日本語補習授業校みなと学園へ通学させており、その関係で筆者が調査協力をとりつけた人々である。年齢は30・40代がほとんどであるが、調査時点での滞米年数は多様で、1年1カ月から20年近い人までいる（調査の目的から、滞米1年に満たない場合は本稿の分析対象とはしなかった)。また夫の滞米形態から見ると、滞米期間が1年から3年とあらかじめ決まっている、研究者である夫の研修留学（21人中1人：B)、3年から5年という予定の企業派遣の駐在（7人：A・C・E・F・G・I・J)、その予定が延びて10年を越えて滞米している駐在員（4人：M・N・O・P)、長期または永住の予定で現地で事業や研究をしている人（5人：D・H・K・L・Q)、またアメリカ人と結婚している人（4人：R・S・T・U）などさまざまである。21人の母親全員が日本語を母語（第一言語）としているが、その配偶者のうち3人は英語が母語である。

滞米年数と滞米形態との間には、かなり高い相関関係があるといえる。その

大きな理由の一つは、外国に暮らすということで在留資格（ビザ）が必要だということである。そのため、21人の母親たちを滞米年数と滞米形態によりいくつかのグループに分けておく。まず、アメリカ人を配偶者にもつ4人を「国際結婚組」と呼ぶ[16]。これら4人は全員滞米10年以上である。次に、配偶者も日本語を母語とする17人を滞米5年未満組と滞米5年以上組とに分けてみると、前者が10人、後者が7人である。

本文の末尾に、4人の母親（A・G・N・S）とのインタビューのうち、メディア使用や対面コミュニケーションに関する部分のトランスクリプトを付図として掲載する（ただし、Nの200番台は本文中の図3）。Aは、アメリカに来て間もない駐在員夫人で、小さい子供がいる例として、Gは、駐在員夫人でも、高度な英語力を有する例として、Nは、長期滞在だが、あまり英語メディア使用を確立していない大半の日本人母親の代表例、Sは、国際結婚組だが、子供には日本語教育をと考えており、その関係か日本語メディア使用がかなり残る例として位置づけられる。調査協力者21人の全体像は、本文中で明らかにしていくが、これら4人のトランスクリプトは、生活史というまとまりをもった各人の状況の理解を助けるものとして提示されている。

Rosengren（1994b：53）は、メディア使用（media use）をその操作化により「習慣的（habitual）メディア使用」と「実際の（actual）メディア使用」とに分けている。前者はインタビューや質問紙によりそのデータが集められるのに対して、後者はそれらの手法（日記式は質問紙法の一例である）に加えて、ピープルメーターやいわゆるESM[17]などの直接観察などによりデータが収集される。習慣は傾向的な現象であり、実際の使用とは完全に相関しない。習慣的使用が比較的安定した要因に依存しているのに対し、実際の使用は（変動の大きい）状況的要因に依存するところが大きいからである。Rosengren はこれらの一方を基準にして他方を評価し、その妥当性を云々するのはすすめられないという。大切なのは、自分が扱っているのがどちらのデータなのかをきちんと理解することだという。ちなみに、彼が報告しているMedia Panel Programのデータは、基本的に、習慣的メディア使用である[18]。

表2. 21人の母親の属性

	年　齢	学　歴	滞　米	配偶者の在留形態
A	40代前半	高卒	1年1カ月	日本企業の駐在員
B	30代前半	大卒	1年4カ月	医師として海外研修
C	30代後半	大卒	1年11カ月[a]	日本企業の駐在員
D	30代前半	大卒	2年3カ月	駐在員から独立
E	30代後半	大卒	3年2カ月	日本企業の駐在員
F	30代後半	高校中退	3年4カ月	日本企業の駐在員
G	30代後半	大卒	3年5カ月[b]	日本企業の駐在員
H	30代後半	大卒	4年0カ月[c]	研究者として長期滞在
I	30代後半	大学中退	4年6カ月[d]	企業の駐在員
J	40代前半	短大卒	4年6カ月[e]	日本企業の駐在員
K	40代後半	大卒	5年7カ月	調理師として長期滞在
L	40代前半	大卒	7年10カ月[f]	研究者として長期滞在
M	30代後半	大卒	10年7カ月	日本企業の駐在員
N	30代後半	短大卒	12年	日本企業の駐在員
O	40代前半	高卒	13年2カ月	日本企業の駐在員
P	40代後半	(不明)	13年2カ月	日本企業の駐在員
Q	30代前半	大学院卒	14年	技術者として永住
R	40代前半	大卒	16年	アメリカ国籍
S	40代	大卒	18年	アメリカ国籍
T	3・40代	大卒	10年以上	アメリカ国籍
U	40代	高卒	15年以上	アメリカ国籍

a：以前、夫婦でニューヨークに1年滞在（表の期間に含まず）

b：結婚前に、ロンドンに2年滞在（表の期間に含まず）

c：今回6カ月。以前、ワシントンに3年6カ月滞在（表の期間に含む）

d：シカゴに1年（表の期間に含む）滞在し、サンディエゴに転勤

e：以前、ジャカルタに3年滞在（表の期間に含まず）

f：以前2年半サンディエゴに滞在（表の期間に含まず）

Rosengrenのこの区別によれば、本稿で提示されるデータは「習慣的」なものである。筆者は、母親たちのコミュニケーション行動を体系的に直接観察・調査したわけではない。しかし、インタビューによって集められた「習慣的」コミュニケーション行動によっても、筆者がめざす、異文化に育つ日本人の子供の社会化環境の解明に大きく貢献できると考える。また、体系的なものではないが、直接的なデータ収集は筆者の現地での生活のなかでなされており（筆者とその家族のコミュニケーション行動、マスメディアとの接触、あるいは母親たちとの散発的な接触・観察などを通じて）、インタビューによって収集された情報の信頼性に大きな問題はないと思われる。

Rosengren（1994b：50）は、さらに、メディア使用の4側面を区別している。メディア使用の量、メディア内容のタイプあるいはジャンル、メディア使用により確立された関係のタイプ、メディア使用の文脈のタイプ、である。本稿で報告するデータは2番目のメディア内容のタイプが中心で、残念ながら、他の側面については若干の推測の根拠を提供するにとどまるが、この限界は将来の研究によって克服されるべきものであると考える。

1．新聞　自宅で日本語の新聞を定期的に購読しているのは、21人中13人だった。その内訳は、朝日新聞が4人（A・D・J・M）、読売新聞5人（C・E・F・I・L）、羅府新報が4人（N・O・P・T）だった。朝日購読家庭のうち1家庭（D）は日本経済新聞も取っていたが、この家庭の父親は駐在員から独立して自宅を事務所にして事業をしている人で、その関係でウォールストリートジャーナルも購読していた。

羅府新報の購読者は長期滞在者ばかりで、4人全員が滞米10年以上である。そのうちの一人Oは、日本の新聞ではなく羅府新報を読んでいる理由として、長く読み慣れているからという意味のことを答えたが（前掲図1：O101 - O117参照）、第2節で述べたように日本の新聞がサンディエゴで簡単に定期購読できるようになったのは、1987年の終わり以降のことである。

日本語の新聞を購読していない8人のうち、2人（G・Q）は知人などからまわってくるのを読み（付図G：G041 - G044）、他の2人は忙しくて新聞を読む暇

もないとのこと。その1人（K）は夫の経営している日本料理店を手伝っており、もう1人（B）は、アメリカに来て子供を生んだばかりで子供の世話に追われているということだった。残り4人のうち、3人は配偶者がアメリカ国籍で、あとの1人は長期滞在予定の医師夫婦（H）だった。

英語の新聞については、長期滞在の5人（Q・R・S・T・U）には何新聞を購読しているか、また、どの程度読んでいるかとという質問はしなかったので[19]、残りの16家庭についてのデータを見ていく。このうち、英語の新聞を購読していたのは9家庭だった。全9家庭がサンディエゴユニオンを購読していたが、そのうち2家庭はもう1紙購読していた。ロサンジェルスタイムズを購読しているG家と前出のウォールストリートジャーナル購読のD家である。

英字紙を購読している9人の母親のうち、まあ読みこなしていると思われるのは3人で（G：「一応目は通しますけれども」(G053) ・H・L)、他の母親は、「読むのは身の上相談と漫画」(D)、「1面だけ」(E)、「チラシを読むぐらい」(F)、「絵を見るだけ」(J) という4人と「イラク問題で読むようになった」(I)、「何か事件があった時だけ」(M) という2人に分かれるが、どちらも、日本語の新聞に対するものとはかなり異なる姿勢が感じられる。これは、ある程度読みこなしていると自認する人たちにもあてはまることで、あとで詳しく見るが、1人の母親は、「(英語の) 新聞を読んでも、日本で日本語の新聞を読んだりするような速度と理解力をもってはできない」(後掲図2：H017 - H019) と言っている。

2. テレビ　テレビの日本語放送を見ないのは、放送が入らないという1家庭(F) を除いては[20]、配偶者／父親がアメリカ国籍である4家庭（R・S・T・U）ぐらいで、残りの16家庭は見ているということだった（Hにはこの質問をし損ねる)。ただ、視聴の熱心さというかそれを楽しみにしている度合いは、滞米が長い人の方が強かったりするようである。日本語放送を「欠かさず見る」、「きっちり見る」と回答したのは、滞米がそれぞれ12年以上（N：N164）と13年2カ月（O）の2人であるし、滞米14年になるQは、現在屋外に大きなアンテナをたてているために、KSCIとは別のもう一つの日本語放送が受信できてい

るが、引っ越したらそれが見られなくなってしまうので、引っ越しもしたいができないと言っていた。

もちろん、滞米の短い人たちが日本語放送を見ないというわけでも、それに執着していないというわけでもない。今回の調査では、ビデオ視聴については断片的にしか聞かなかったのだが、これが話題に挙がった場合（3家庭：B・C・F)、全家庭で日本語のビデオを見るという回答だった。テレビとビデオの視聴を合わせると、母親のメディア使用における日本語メディアの割合はかなりのものと言える。

英語のテレビ番組の視聴はというと、日本語放送の時間が限られているので、見ないという母親は少ない。英語のテレビ放送を見ないのは、忙しくて「テレビはあまりかけない」(A：A258 - A260)、「あまりテレビを見てる暇がない」(E)、「(メディアは）日本語のみ」(P）という3家庭である。残りの母親は、なんらかの番組をよく見ていると回答したが、ニュース（8人）と映画（7人）がよく見る番組として挙げられることが多かった。対して、ドラマと回答した母親は1人（G：G040)、『ルーシーショウ』1人（J）だった。

この『ルーシーショウ』などは、シトコム（situation comedyの略）と呼ばれるもので、アメリカでは人気番組の一つだが、英語力の問題からかあまり視聴されていないようである。ここでは詳説できないが、アメリカでは日本的なクイズ番組やドラマが少ない。クイズ番組も『クイズタイムショック』形式の参加者とともに視聴者としてクイズに参加する方式が多く、『クイズダービー』形式の回答者の回答を楽しむという形式は少ないようである。ドラマについていえば、サスペンスものは多いが、それ以外のドラマは少なく、若者の生態を描いて人気を博した『ビバリーヒルズ青春白書』などは少数派である[21)]。

総じて、日本語のメディアに依存している日本人母親の姿が浮かび上がってくる。英語力という言語能力要因が大きく影響していると考えられるが、日本語メディアの発達によりメディア構造が変化している側面も見逃せない。代替メディアとして日本語新聞や日本語のテレビ放送があるのだから、苦労して英語のものに取り組もうという気持ちも少なくなると考えられる。

4. 対人的コミュニケーション：交友関係

メディア接触に続いて、本節では、対人関係を取り扱う。コミュニケーション行動のうち、メディア使用とならぶもうひとつの柱が対人的コミュニケーションである。マスメディアを介さない、直接的なコミュニケーションはどうなっているのか、21人の母親たちについて見ていく。

1. アメリカ人とのつきあい　「おつきあい」という言葉を使ってたずねたが（たとえば、A228参照）、交友関係は、英語でコミュニケーションをする現地アメリカ人や他の外国人よりも、日本人のほうが多いという人が大多数であった。日本人以外とのつき合いのほうが多いと言い切ったのは2人（Q・T）で、どちらも永住組である。そのほかは、「圧倒的に日本人が多い」（C）、「確実に日本人が多い」（D）、「どっちかっていうと日本人」（J）、「6：4で日本人」（L）、「格段に日本人が多い」（M）、「全然こっちのかたとのおつきあいができなくって」（O）などと、表現は異なるものの交友の比重が日本人に置かれていることがわかる。

アメリカ人の友人がいる場合、その知り合うきっかけとしては、「近所に住んでいる」（F・I・J・N：N112 - N122・Q）や「子供が同じ学校に通っている」（N：N113 - N115・Q）、「教会」（K・S：S032 - S038）、同じ習いごとや趣味のサークルやチームに入っている、あるいは、英語を教わっているチューター（A：A005 - A008・B・C）や職場の同僚（H）などが多い。また、つきあいのあるアメリカ人も「普通のアメリカ人」ではなく、日系人（A：A217 - A223）や親日家であることが多い。自分も働いているHは、例外的存在である。職場でアメリカ人との接触の機会があるからである。

アメリカ人とのつきあいがない理由としては、「近所の主婦／母親はみんな勤めに出ていて、友達になる暇がない」（A：A234 - A238・D・J）というのが挙がったが、英語力の問題ももちろん大きい。Dが、「自分の、英語力にも限りがあるので、最近では、もうやっぱり、こういう、突っ込んだ話ができない外国人と、友達になってもおもしろくないのかなと、あのアメリカの人がね、

そういう風に考えたりすることもあるんですね」と言っているように、買い物などの日常の用はなんとか足せるものの、「おしゃべり」的な会話ができるほどの英語力はなかなか身に付かないようである。

2. 学校の先生とのカンファランス　子供を持つ母親にとって、現地の学校の先生との懇談（カンファランス）は、英語を使っての対人的コミュニケーションのなかでも避けては通れないものである。これにどう対処しているかは、アメリカ人との対人関係や自分の英語力を母親たちがどう評価しているかをうきぼりにするものである。

子供の先生とのカンファランスに、ひとりで行くかどうかの情報が得られた10人のうち、自分ひとりで行くという母親は、4人（D・E・G：G008 - G009・L・M）と少なくない。他方、英語力に不安があったりする場合は、家庭教師（A：A203 - A210）、夫／父親（C・I・N：N007 - N009・S）、あるいは、子供本人（K）と行くことになる。しかし、夫／父親と一緒に行く場合、必ずしも父親のほうが母親よりも英会話に堪能であるとは限らず、子供の教育へ父親も関与する機会を作ろうという母親の戦略を反映するものである場合も多い。アメリカ社会では、子供の教育は母親まかせではなく、父親も積極的に教育に参加している。学校の行事も、父母の都合を考慮して夜に行われることが多い。たとえば、アメリカ人である、Sの夫は子供の教育に「一生懸命」で、学校の行事には必ず行くというが（S064 - S071）、これは、日本人父親にはあまり見られない姿ではないだろうか。

子供の現地校での様子は、母親としては、もっとも気がかりなことの一つであり、自身の英語の不安に関わらず、学校まで出かけて先生と接触し、また、その手伝いをすることになる。アメリカの小学校では、特に低学年で、母親が教室で手伝いをすることが多く、ヘルプやボランティアと呼ばれている。教室では、テストの採点を手伝ったり、英語のしゃべれないわが子の通訳を務めたり、また、図書館で本の整理をしたりというのが、日本人母親がよく手伝っている作業である。自分の子供の教室へ「クラスヘルプに行く」（C・E・I・N：N123 - N139・R）、「ライブラリーへボランティアに行く」（J）、あるいは、「送

り迎えの際に先生に子供の様子を聞く」（D）というかたちで、母親たちは先生と関係を持っている。Dが言うように、「顔と顔が合って」、「面と向かって話せば、［流ちょうな英語でなくとも］意思も通じる」のである。

3. ほかの日本人の母親とのつきあい　ほかの日本人とのつきあいが、日本人の母親たちの家庭外での対人関係の大半をしめている。知り合うきっかけの一つは、子供である（C・K）。本研究で取り扱っている21人とのインタビューは、2人1組を除いては、単独でのインタビューであった。唯一のグループインタビューとなったEとGだが、この二人は、娘同士が小学3年生で、みなと学園で同級で仲良しという関係から、一緒にということになった[22]。また、D・N：N104 - N110・Sの3人も息子同士が仲良しである。グループインタビューとはならなかったが、3人で話し合って、筆者の調査に協力しようということになったようである。それぞれのインタビューでも、3人の関係を物語る話題がよくでてきた。SがDのところから朝日新聞をまわしてもらっている（S094 - S099）、あるいは、Sが息子の日本語の遊び相手としてNの次男によく来てもらった（N212 - N224）とあるが、さらに、Nの三男が見ている、「お友達からまわってきたり、貸していただいたり」するビデオ（N270 - N271）というのは、Sの姉が録画して日本から送ってきたもの（S114 - S131）と推測される[23]。

つきあいのきっかけとして、子供とならぶのが、夫の会社の同僚の夫人同士という関係である（F・I・N：N104 - N110・O）。同じ会社に勤務する駐在員の間では、先輩の駐在員やその夫人が、新しくやってくる駐在員やその家族の世話をして、異郷での生活が軌道に乗るのを助けるということが一般的に行われており、母親にとっても、サンディエゴにやってきて最初に知り合う日本人が職場関係者ということは多い。企業によっては、家族の世話を職務とする社員を置いているところもあるが、大半は、先輩駐在員の夫人が新しく来た人の家族の世話をして、車の免許取得・買い物・子供の学校の手続きなどを手助けしている。ここにも企業カラーがあり、日本でも「家族的経営」で知られているY社は、妻たちの絆も強く、電話連絡網まで作られている。また、NやOの夫が勤務するW社は、日本からの駐在員に長期に駐在させる方針を取っているよ

うで、N・O・Pの滞米は10年以上である。それだけに、彼女らの関係も深いようである。

「つきあう」といってもその中身はいろいろあるが、基本は訪問しあって、お茶を飲んでおしゃべりをするということのようである。小学校入学前の幼児がいる7人の母親は（A・B・C・D・F・N・Q)、子供の世話で忙しいが、それでも、その子供の年齢が近い場合は、子供を連れて訪問しあうこともできる。子供を一緒に遊ばせながら、母親同士はおしゃべりをする、上述のNとSの関係は、これに類したものであったことがうかがわれる[24]。

おしゃべりのほかには、習い事がこのような場でよくなされる。パッチワーク・キルト・トールペイント[25]・刺繍などを一緒に習うというのが多い（F)。Iは、夫の転勤でシカゴからサンディエゴにやってきたのだが、シカゴで習った手芸をほかの日本人の母親たちに教えていた。かわったところでは、Lの「グルメの会」で、友人同士でおいしい店を見つけて食べ歩きに行っていると言う。

仲間の家に講師に来てもらい、グループで習い事をするという他に、アダルトスクールやコミュニティカレッジでの講習会に誘い合って参加するということもある（G：G028 - G030)。講習会は、パッチワークなどのクラフトのほか、英語やテニスなどのスポーツのコースもあるが、逆に、このような講習会にひとりで参加して、ほかの日本人講習生と友達になるという場合もある（A：A233 - A234)。

4. 家族とのコミュニケーション　最後に、日本人の母親たちの、家族とのコミュニケーションを見ておこう。夫が日本語を話さない3夫婦（S・T・U）を除いては、夫婦間の会話は日本語である。また、子供に対しては、全員の母親が日本語で話しかけている。Qは一時期、子供に英語で話していたというが、子供がみなと学園に通いだして、日本語に切り替えたようである。アメリカ人と結婚している場合でも、母親は子供には日本語を使って話している（S・T・U)。子供をみなと学園に通学させているという事実からもわかるように、これらの家庭は日本語教育に熱心である。国際結婚組4家族には、将来の生活の根拠を日本にと考えている家族はいないが、英語とアメリカの学校教育に加

えて、日本語も子供に習得してほしいと考えている。「親と心の底から交流できなくなってもらっては困る」(H)、「日本人だから、日本の教育もちゃんとしましょう」(R) などと、永住組も考えている。

このように、母親が子供の日本語教育において重要な役割を果たしているという事情を考えると、現地にとけ込んでいないと一口で評してしまうわけにはいかない。全体としては、アメリカ人や英語のマスメディアとの接触が非常に少ない生態が明らかとなったわけだが、母親たちは、異郷で子供たちを「日本人」として育てるための場を作り、また、直接教えるという労を取っているのである (A：A244 - A245・E)。

また、地域に日本人が増えるにともなって、日本人向けのサービスも発達してきている。日本語マスメディアの充実はその一部であるし、日本食料品店の新規開店もあった。病院では、日本語通訳を用意しているところもあり、母親Aがいうように、英語を話さなくても、「もう、日本語だけでも［生活して］いけ」る (A223 - A227) のである。

5. 日本人母親のコミュニケーション行動を規定する要因

本節では、これまで紹介してきた母親たちのコミュニケーション行動を規定する要因について考察する。21人の母親たちのメディア使用や対人的コミュニケーションが多様なものであることは明らかとなったと思われるが、その多様性のなかに見られる規則性に迫りたい。まず、覚え書き的に、質的データから規則性（理論）を導き出す手続きについて検討し、次に、滞在期間・個人要因・生活形態の3要因について考察する。

1. 事例研究にもとづく知見の一般化可能性について　事例研究法の教科書のなかで、Yin (1988) は、事例研究法における事例は、サーヴェイにおけるサンプルと混同されるべきではないと主張する。彼の主張を少し詳しく見ていくことにする。

実証研究では、収集したデータからいかなる結論（命題・理論）を引き出すかが一つの鍵である。サンプリング手続きにもとづくサーヴェイ法の場合、

「統計的一般化」により理論構築がなされる。統計的一般化では、あるサンプルについて集めたデータから母集団についての推測（inference）がなされる。Yin（1988：35 - 40）は、事例研究における事例の一つ一つをサンプリングの単位であると考えるのは、誤りであるという。個別の事例は、実験研究における一つの独立した実験とみなすべきで、複数事例を対象とする事例研究は、複数の実験やサーヴェイと比するものと考えるべきであるという。このような、事例研究で使用される一般化の方法は、統計的一般化ではなく、「分析的一般化」でなくてはならない。分析的研究では、あらかじめ用意されている理論が、ある事例の研究から経験的に得られた知見を比較するテンプレートとなる。もし、複数の事例がある理論を支持するという結果が得られたならば、それは、追試（replication）が成立したと考えるべきなのである。

Yin は、事例研究の理論構築を説明するのに二種類の推測を区別する。彼によると、レベル2の推測は、サーヴェイや実験で使われているもので、あるサンプルや被験者についてのデータから一般化するもので、事例研究には、このレベルの推測は不要である。対して、レベル1の推測は、レベル2より高次のもので、サーヴェイ・実験・事例研究のすべての方法に共通の理論構築手続きである。ある理論とそれと対立するライバル理論とのどちらを選択するかを決定するのが、レベル1の推測である。

しかし、事例研究にサンプリングが無縁であるかというとそうではない。シクレルは 、事例研究においても以下のレベルでサンプリング的考察が不可欠であるという。どの事例（組織）を研究対象として選択するか、ある事例（組織）のどの場面を研究するか、ある場面のどの参加者に照準するか、ある参加者のどの行動を問題とするか、などである。つまり、ある事例について情報を収集するとしても、調査対象としてどの「行動」を選ぶかによって結果が大きく変わる可能性があるというのである（南 1995b参照）。

たとえば、CsikszentmihalyiとKubey（1981）は、体系的で信頼性の高いデータを得るために、経験サンプリング法（Experience Sampling Method：ESM）という技法を開発した。これは、被調査者に電気式呼び出し器（いわゆるポケットベル）を持たせて起床時間中ランダムに連絡し、その時点で従事している

活動や気分などを回答させるというものである。これは、つまり、調査時点をサンプリングする方法の一種と考えられる。この方法により、1日24時間（あるいは、覚醒中の10数時間）の活動や気分の分布がわかるのである。

本研究のデータは、第3節の冒頭で論じたように、「実際の」ものではなく、自己報告（self-report）によって得られる「習慣的」データである。この意味で、行動レベルでは、すでに「集計」され、「まとめ」られたものである。また、対象となる行動場面は、研究関心より、上述のようなメディア使用場面であり、また、対面関係が要求される場面であった。本研究でサンプリングが問題となるのは、事例である一人一人の母親（あるいは、家庭）のレベルである。

本研究で取り上げた21人の母親が、サンディエゴに生活する日本人の母親のタイプを網羅しているかどうかを考えてみると、その答えは簡単ではない。しかし、大切なタイプの事例が漏れていないかと自問してみると、一つのタイプを除いてはあまり考えられない。「子供の日本語教育に熱心ではない母親たち」が、本研究で取り上げられていないタイプである。たとえば、国際結婚している場合は、日本語教育の必要性を感じていない母親もいる。その場合、みなと学園のような日本語補習授業校へ子供を通わせたりしないであろう。そうすると、当然、筆者の調査対象ともならない。たとえば、Sの家の近くに住んでいる女性は（S006 - S018）、子供に日本語を教えなかったという。しかし、注2でもふれたように、このような母親を「日本人母親」に含めるのが必要、あるいは、妥当かと考えると、答えは否であろう。以上の考察より、ひとまず本研究では、日本人母親のタイプは網羅していると考えられる。

さて、Yin が主張するように、事例研究から理論構築をする際の手続きは、分析的一般化である。ここでは、母親たちのコミュニケーション行動の分析的一般化として、滞在期間・個人要因・生活形態の3要因がコミュニケーション行動の説明変数としてどの程度重要であるかについて簡単に考察する。

2. 滞在期間　アメリカ生活や英語への慣れを左右する要因の第一は[26]、滞在期間である。まず、生活に関していうと、1年という期間がどうしても必要である。1週間、1カ月、3カ月、6カ月と、生活が落ちついていく節目は存在するよ

うだが、やはり、丸1年滞在し、いろんな行事を実際に経験してみて、2年目以降主体的にことに当たれるようになる。

本研究の対象となった母親のうち、滞在期間が短い4人（A・B・C・D）は、学齢に達しない子供がいることもあり、メディア接触も対人的コミュニケーションもあまり活発ではない。例外として、Cが、「アメリカに来て本をよく読むようになった」と述べているのが目につくぐらいである。

滞在が3年をすぎた母親たちからは、一種の落ちつきが感じられる。サンディエゴでの生活はこんなものなんだということが、感覚的にわかってくるようである。生活的には落ちついて、また、アメリカ生活への幻想もなくなってくる。「こちら（アメリカ）へ来たら、もう来たら、もう、1年おるだけで、もう英語が全部話せるようになるんだろうと、勝手に想像」していたというAだが(A101 - A103)、滞米1年1カ月で「とても及ばない」ことがわかったと言う。滞米2年3カ月のDも、「こちらに来る前は、もっと、現地の、あの、なんて言うのかな、日本人社会、にとどまらないで、あの現地のアメリカ人のなかにもっともっと入っていこう、というつもりで来たんですけれども、現実、そうは、なかなかむずかしくてできない、っていうのを感じて」と言う。アメリカに数年滞在したからといって、生活は落ちついてくるものの、英語が話せるようになってアメリカ人の友人ができて、ということにはならないのである。

逆に、そのような思いこみから自由になり、現実が見えてくるというのが、アメリカ生活の効果なのではないかとも考えられる。「アメリカに住めば英語がペラペラになる」という幻想は、筆者もかつてはとりつかれていた。しかし、滞米7年余りの自己の経験を振り返ったり、滞米13年のPが、「あたしは日本語一本」というのを聞いたりして、英語習得の困難さを痛感するとともに、母語である日本語、あるいは、日本文化の影響の強さにあらためて驚くものである。

3. 個人要因　滞在が長くなってくると、コミュニケーション行動のパタンは大体安定してくるようだが、コミュニケーション行動は、滞在期間という独立変数の従属変数として、一意的に（uniquely）決定されるものではない。母親一人一人の個人的要因も、コミュニケーション行動に大きく影響している。な

かでも、とりわけ重要なのが、教育水準である。

とはいえ、日本の学校制度における教育水準は、アメリカでの、英語によるコミュニケーション行動の説明要因としては、あまり説明力の高いものではない。大学の英文科を卒業している母親のなかにも、英語での生活にかなり不自由を感じている人がいる（D・E）[27]。また、専門が英語ではなくとも、英語

図2. 母親Hとその夫Zとのインタビュー（1991年2月8日）

H001　南：あのう、英語なんかは、特に、支障っていうか、あまり、
H002　H：親のほうですか。
H003　南：はい。アメリカに来るにあたって、抵抗なかったですか。
H004　H：支障、ていこ
H005　Z：支障は常にありますから。
H006　H：支障っていうのは常にあるけれども、ただ、それは、わたしはいつも思う
H007　　んですけど、非常に自覚的な問題、だと思うんですよね。わたしも主人も、
H008　　わりと、
H009　南：と、おっしゃいますと。
H010　H：人とコミュニケーションするようなことは、まあ、簡単に言っちゃうと、
H011　　日本人のなかでは非常に話せるほうだと思います、わたしも主人もね。
H012　南：はい、はい。
H013　H：で、日本人、オーディナリーな日本人のはるかに、よくしゃべれるとは思
H014　　いますけれども、アメリカで暮らしている限りにおいて、外国語としての
H015　　不自由さを感じないでは暮らせないだろうと思うんです。
H016　南：ああ、なるほど。
H017　H：例えば、テレビを見ても新聞読んでも、日本で日本語の新聞見たり日本語
H018　　の新聞読んだりするような速度と、え、理解力をもっては、決していかれ
H019　　ないわけでしょう。
H020　南：はい。
H021　H：ただ、まあ、そのう、最初の、一年ぐらい、でしょうかね、半年、ぐらい
H022　　かしら、それは、あのう、非常に言いたいことがうまく言えない、ってい
H023　　うような気分はずいぶん味わいましたし、もちろんいまでも味わってます
H024　　けどね。ただ別に、あのう、研究所の人と話をするとかご近所の人と話を
H025　　するとかっていうことで困ることは、別にない。
H026　南：ああ、なるほど。

にかなり自信をもっている母親もいる（G・H）。

基礎的な英語力、あるいは、語学力とならんで重要と思われるのが、いわゆる「性格」である。思ったことを口に出すか出さないかは、それ自体としてコミュニケーション行動を大きく左右するし、また、英語力の習得にも影響を与えると考えられる。会話に参加するなかで、英語力に磨きがかかるのである。話し好きな人は、カタコトの英語でも積極的に会話に参加し、その結果として会話力が伸びる。寡黙な人は、逆にいつまでたってもしゃべれないということになる。日本社会で、文化的に寡黙が尊重されていることも日本人の英語会話力が上達しない理由の一端とも考えられている[28]。

しかし、図2に見られるように、滞米期間が前回と通算して4年あり、日本でも最難関の医学部を卒業したHでさえ、「外国語として不自由さを感じないでは暮らせない」（H014 - H015）と言っている。「（英語で）テレビを見ても新聞読んでも、日本で（第一言語である）日本語の新聞見たり日本語の新聞読んだりするような速度と、え、理解力をもっては、決していかれない」（H017 - H019）と感じているのだ。この発言は、バイリンガリズム（二言語併用）について、考える糸口を提供してくれる。成人してからでは、どんな基礎能力がある人でも、どれだけ長く滞在しても、英語が第一言語になることは非常にむずかしく、また、第二言語習得のレベルをはかる基準としては、第一言語が使われるということを示している。

4. 生活形態　コミュニケーション行動を説明する第3の要因が、生活形態である。行動の場面としてどんなものがあるかということである。国際結婚組の3人（S・T・U）は、配偶者が日本語をしゃべれないので、英語を話す機会が多くなる。新聞も日本語のものを購読することはないし、また、日本語テレビ放送を見ることもほとんどない。日本語メディアへの接触が少ない分、英語メディアの使用が増えることになる。

このゼロ・サム関係が明瞭なのが、対人的コミュニケーションにおいてである。特に、アメリカでは夫婦ぐるみ、あるいは、家族ぐるみのつきあいが多いので、つきあいは英語ということになる。もともと、これら3人の母親は、英

語が得意だったり好きだったりした人たちである。SとTは、英語を勉強するためにアメリカにわたり、そこで配偶者と知り合った。Uは、東京郊外の米軍基地の町に育ち、そこに駐留していた軍人の夫と結婚した。そういう経緯から、結婚生活では英語が中心となることは予測できたに違いない。英語でのコミュニケーションに苦痛を感じるようなら、そもそも、知り合うこともなかっただろう。

母親にとっては、生活形態は選択的なものである側面が大きいが、子供にとっては、与えられたものである。また、これが将来の語学力などに対して及ぼす影響は、母親とは比べものにならない。日本人学校か現地校プラス補習授業校かという選択が重要であるという指摘はすでにしたが、最後にビデオの威力について検討しておく。

Nの三男は、アメリカで生まれ育ったというのに、年齢3歳8カ月のインタビュー時点で英語がしゃべれず、また、1年半以上通っているというのに、いまだに毎朝プレスクール（保育園）[29]に行くときに泣くという（N201 - N244）。Nの長男と次男も、同じように、生まれた時からアメリカ育ちだが、そんなことは全然なかった（N205）。母親であるNのみるところ、その理由は3つある。まず、最初に「日本人が多い」プレスクールに入れたこと。第2に、末っ子として「甘え」ており（N233 - N235）、また、兄が二人いるために家庭が楽しいものであり、友達がいるプレスクールの楽しさがわからない（N248 - N251）ということ。そして、第3の理由がビデオである。

Nの長男や次男が小さかった頃は、N家にビデオが無く、二人が見たテレビ番組はセサミストリートなど英語のものばかりだった（N256 - N257）。ところが、三男はいつも日本語のビデオ番組ばかり見ている。彼が、兄二人と違って一人英語がしゃべれないとすると、このビデオ視聴をその理由として考えるのも当然である。筆者が話を聞いたなかでも、日本語教育のためにも、ビデオを見せる、あるいは見て欲しいという母親は少なくなかった。たとえば、Nがビデオをまわしてもらっていると推測されるSもその一人である。しかし、近いうちに帰国予定がないN家にとっては、英語がしゃべれないということも大きな問題なのである。

図3. 母親Nとのインタビュー（1991年1月18日）
（行番号が示すように、付図Nに集録した部分より後の部分である）

N201 南：あの、アメリカの現地校、まあ、プレスクールから入れられたわけですけ
N202 ど、最初、そういうふうに、その、お母様と日本語だけの世界から、現地
N203 校の英語、っていうか、そういうところにへ入られて、あの、ぐずられた
N204 りというか、適応に問題があったとか。
N205 N：あ、いえ、もう上二人は全然なかったんですけどね、3番目のいまの子、いま
N206 だに泣いてます。
N207 南：あ、そうですか。
N208 N：ええ、もう2年近く行くんで、1年、2歳からでしたからね。もうすぐ、今度
N209 の6月で2年になるんですかね。いまだにだめですね。あの子、それで、英
N210 語がしゃべれないんですよ。
N211 南：ほう。
N212 N：ええ。だから、NB、2番目の子がですね、あの、いまの3番目の子の年のと
N213 き、ちょっと、あんまりにもいまの子が泣くもんですからね。その、お友
N214 達なんかと、その同級生のお母さんなんかと話してたら、いや、その一人、
N215 こちらの、アメリカ人と結婚されてて、だけど、お子さんには全部日本語
N216 で話された、お友達のかたいらっしゃるんですけどね。そのかたとも、ち
N217 ょっと、そういう話がでたら、自分のいえは、あの、ほら、やっぱり日本
N218 語が、お母さんとだけだから、その、幼稚園がたまたま、そのNBとそこの
N219 お子さんと一緒だったから、あの、「NBちゃん、遊びに来て」ていって、
N220 よく連れて行ってくれてたんですよね。だから、彼女としては、NBに日本
N221 語をしゃべってもらって、その遊びをしてほしかったのに、自分は、「NB
N222 ちゃん、日本語で。日本語で」て、いつも注意するぐらい、英語だった、
N223 って言うんですよ。ところが、おない、同じ年なんですよね、いま、下の、
N224 3番目の子が。日本語だけ、なんです（笑い）。
N225 南：あ、なるほど。
N226 N：で、英語が、全然しゃべれないから。だから、というのはなぜ、あ、原因
N227 はわかってるんです。要するに、日本人が多い学校に入れてるからです。
N228 南：ああ。プレスクールが。
N229 N：ええ、プレスクールが、もう日本語、まわり、みんな日本語ですからね。
N230 だから、ちょっと、考えて、いま、プリスクール、2年目なんですけど、1
N231 年目そうだったから、今度のスクールは、そっちに半分と、あと半分は、
N232 あの、日本人が、あ、一人だけ、ですね、教会のところ、に入れてるんで
N233 すけど。やっぱり、英語ができないからぐず、不安でぐずるのか、ただの
N234 甘えなのかは、まだわからないんですけど。まあ、甘えもあるのだろうな、
N235 3番目の子ですからね。ていうの、あるんです。ま、その、どっちだろうと
N236 思いながら、まい、もう、いっつも、（笑い）いやだいやだと言って、言い
N237 ながら。だけど、あの、行ったら。そして、あたしと離れる時に、もう離

N238 れないから、こうして。で、先生が、NE［3番目の子の名前］、おいでって
N239 言って、こうしてくれて。そしたら、なんか、「うーん」とか泣いてるんで
N240 すけどね、もう、ものの2,30秒だっていうんです、先生に言わせると。で、
N241 あとは、もう、すごくエンジョイしてるって言うんですよね。だから、甘
N242 えだけかなと思ってるんですけどね。かといって、その、エンジョイして
N243 るけど、英語をこうしゃべるわけじゃないんですよね。ただ、まあ、しか
N244 たないから、遊ぼうと（笑い）。
N245 南：その、上のかたにしても、プレスクールにいれられるまでは、もう、そし
N246 たら、ほとんど英語には接触しなかった。
N247 N：してないですね。プレスクールの時、もちろん、プレスクール。そして、
N248 やっぱり、上の子なんか、あれですよね。お母さんと二人でいるより、あ
N249 のう、そういう学校が楽しいっていうのが、すぐわかるみたいですよね。
N250 で、下の子っていうのは、一番下の子っていうのは、あの、学校行かなく
N251 てもお兄ちゃんたちいるし、いえに。
N252 南：あ、なるほど。
N253 N：うーん。あ、上の子の二人の時はですね、ビデオが、まだなかったんだと
N254 思います、うちに。
N255 南：あ、なるほど。はい。
N256 N：だから、まあ、あのう、英語、帰ってきても英語のテレビでしょ、あのセ
N257 サミにしろ漫画にしろ。だけど今度の子、さん、ビデオがある、いつでも
N258 見てるから（笑いながら）、それもあんまり、よく、よくないというか、そ
N259 のう、まあ、日本に帰る人にはいいんでしょうし、まあ、あたしたちにし
N260 てみれば、それも足引っ張ってるかなあという、ところあるんですよね。
N261 だけど、あ、ビデオぜーんぶ、あのう、無くしてしまうかな、隠してね、
N262 もう無くなったて言えば、まあ子供のことですから、あれだけど、しよう
N263 かなあと思ったりもするんですけどね。ふーむ、むずかしいところですね。
N264 南：その、ビデオでご覧になるのは、やっぱり、日本語のものが多いんですか。
N265 N：そうですよ、うん、全部日本の。要するに、『あんぱんマン』とか、ご存じ
N266 ですか。うーん、あの、『ファイブマン』とか、むかし、なんか名前がいろ
N267 いろ変わって毎年出て来ますよね。あんなの好きですねえ。
N268 南：じゃあ、そういうのをおじいさん、おばあさんが日本からとって送ってく
N269 ださるのですか。
N270 N：そうですね。うちの両親は、あのうなんにもしないんですけど、あの、お
N271 友達からまわってきたり、貸していただいたりしてるんですけどねえ。そ
N272 ういうのも借りなきゃいいのに、（笑い）か、貸してくださると借り、てし
N273 まうし。それに、あの、あれなんですよ、あのう、上の二人に勉強させる
N274 時にじゃまになるから、もう、おもりをしてもらってるようなもんですよ
N275 ねえ。いけっないなと思いながらも、だけど、上の子のじゃまするから、
N276 「はい、テレビつけて、これ見ときなさい」ってね。

つまり、コミュニケーション行動を規定する3つの要因は、複雑に関係しあっている。滞在期間や個人要因は独立でもある程度の説明力を有するが、それらの時間が費やされる環境を構成し、また、個人が行動をおこす場面を形成するものである、生活形態との組み合わせが重要である。たとえば、Nの次男と三男とを比較すると、三男と同じ年齢だった時に、次男ははるかによく英語をしゃべっていたという（N217 - N224）。滞在期間が統制されて（同年齢）、兄弟ということで個人要因も類似のものと仮定すると、その差を生み出すものとしては、環境要因である生活形態である。Nは、プレスクール、末っ子、ビデオの3つの生活形態要因を挙げたが、逆に考えると、ここまで見ていかないと、生活の実態とそれを規定するメカニズムはわからないということである。筆者が、探索的な「記述的」研究にこだわる一つの理由である。

6. 結　語

本稿は、サンディエゴに在住する日本人母親とのインタビューデータにもとづいて、彼女たちのメディア使用と対人的コミュニケーションの実態を報告した。アメリカ社会という異郷に生活するとはいえ、日本語でのコミュニケーションに大きく依存している姿が描きだされた。

フィリピンとシンガポールで調査した柴野は、「日本人コミュニティ」を「つき合いと情報交換のネットワークとしてのコミュニティ」であるという（柴野 1983：90）。筆者の調査から、言語能力がこの「コミュニティ」形成の一大要因であることが示唆される。従来のコミュニティ論は、地域という空間に根ざした地縁にのみ照準しがちだったが、異郷での日本人コミュニティ研究は、コミュニケーションメディアである言語に着目した「メディア縁」とでも呼ぶべきものの存在を示唆する。

主婦の活動グループについて調査をした上野（1988）は、「選択縁」という新しい原理にもとづく集団が生まれているという。上野は、これを「女縁」と呼ぶが、これらは、「旧来型の地縁・血縁の人間関係が解体したあとに生まれた、新しい都市型ネットワーク」であり、「選択性の高いネットワーク」である。「今、脱専業主婦がつくり上げているのは、脱血縁・脱地縁・脱社縁の新

しい人間関係、選択縁の集団なのである」(上野 1988：18-19)。

本稿で紹介した、サンディエゴに暮らす日本人の母親たちの場合、地縁や社縁、あるいは子供縁（これも、社縁の1形態である）によって、関係が成立していると考えるのが妥当と思われるケースが多く心に浮かぶ。W社のNとO、また、子供が仲良しのEとG、D・N・Sたちの関係である。そもそも、本研究の調査協力者は、ひとつの学校を通じて集められた人びとであるから、子供縁が目立つのは当然のことと言えよう。

本研究が、上野による分析に寄与できるとしたら、選択縁の一種として、コミュニケーションメディアである言語という要因もそこに含めて考える必要があるのではないかと指摘しうることである。サンディエゴに暮らす日本人の母親たちは、日本語と英語の両方の言語をメディアとするコミュニケーション行動の機会がある。大半の母親は、英語に不自由を感じ、メディア使用や対面行動では日本語のものを選択する傾向がある。彼女らの交友関係やネットワークを使用言語という観点から見たとき、日本語というメディアでのコミュニケーションを通じて保たれている関係をさすものとして、「メディア縁」という言葉がふさわしいと思われるのである。

コミュニケーション行動の自然主義的研究は、従来のマスコミ研究に一つの変革を迫るものであると考えられる。マス化現象・大衆社会論の文脈では、メディアにふりまわされ操作される存在としての大衆（マス）像が幅をきかせてきた。受け手・生活者の視点に照準した本研究が、これに修正を迫るものとして新しい方向を示し得たとしたら、その目標の一端を達成したと言えよう。

従来、帰国子女と言えば、自文化（母国文化）と異文化（外国文化）という異なる二つの文化に育つという捉え方が、海外・帰国子女の研究者の間には多かった（たとえば、箕浦 1979；江淵 1983)。しかし、すでに筆者が指摘したように（Minami 1995)、自文化である「日本文化」も異文化である「アメリカ文化」も一枚岩ではありえない[30]。生態学的研究により「文化」を脱構築していくという作業が必要とされる。本稿は、この方向で進められている筆者の研究の成果報告の一つである。

注

1　本論文で報告するデータは、筆者のPh.D. 研究（Minami 1993）の一環として収集されたものである。その分析の一部は、成城大学特別研究費の助成を受けた。筆者の留学を援助してくれたカリフォルニア大学サンディエゴ校、調査に協力してくれたサンディエゴ日本語補習授業校みなと学園の先生・児童・保護者のみなさんにも感謝の意を表したい。

なお、本稿のデータは平成6年度の成城大学文芸学部総合講座「変貌するメディア」において筆者が行った講義「異なる文化とメディア」で報告したものである。本稿はこの講義を基盤としているが、理論的枠組みなどに関して大幅に加筆修正されている。

2　「アメリカ文化になじむ」あるいは「異文化化」という表現はあまりこなれていない。生まれ育った文化から離れ、異文化での生活にはいり、それに慣れていくという図式を想定しているのだが、「日本文化」や「アメリカ文化」の一枚岩性を問題としていこうという立場をとる筆者にとって、このような表現は適当ではないのかもしれない。だが、とりあえず上述の図式にたって論をすすめることにする。

「サンディエゴに暮らす日本人」も、実は問題の多い表現である。「日本人」を規定するものが、国籍であるのか、日本語を話すことであるのか、「わたしは日本人」という自己規定（アイデンティティ）であるのかなどによって、「サンディエゴに暮らす日本人」によって指示される人々が変わってくる。本稿では扱いきれない問題だが、本稿はこの問題への筆者なりの回答の方向を指し示すものでもある。

3　なお、どちらにも通学していない子供が全世界で9,722人、全体の20%いるが、彼らは現地の学校に通学しながら、近くにないなどの理由のため補習授業校に通っていない子供たちであると考えられる。このような子供を対象に、海外子女教育財団は通信教育を行っている。しかし、近年は地域にあるにもかかわらず、補習授業校に通わずに塾に行く子供も増えつつあるようだ。たとえば、富永は、ニューヨークで補習校離れが進み、進学塾へのクラ替えが増えていると報じている（『朝日新聞』

米州版1991年2月26日20面)。

4　ジョン・エンブリーは1950年に事故死し、その後エラは再婚してエラ・ウィスウェルとなっている。

5　「行為」と「行動」との区別は大きな問題であるが、本稿ではこれには立ち入らない。基本的に、「行動」を使用することにする。

6　コールの立場については、ワーチの以下の論文が参考になる(Wertsch 1985)。

なお、Gergen (1991) は、ポストモダン社会での関係性やコミュニケーションの重要性を論じているが、関係性を解明していく際に鍵となるのが、メディア(媒介)の概念であると思われる。

7　Davis と Baran (1981) は、「コミュニケーション環境」という言葉を使っているが、コミュニケーションを広義にとる筆者の立場とは相いれない用法である。

8　1990年5月の時点でみなと学園に子供を通学させている250家族中、いわゆる「永住組」は55家族(22%)である。

9　「マキラドーラとは、メキシコ北部地域の工業化、雇用の促進を目的に1965年に設けられた制度で、米国への輸出をねらって外国企業が工場を建設する場合、この制度を使えば、原材料や部品の輸入関税がゼロになり、ここで組み立てた製品の米国輸出が有利になる。

「また、外資規制の対象外となるため、外国企業の100%出資が認められる特典もある。米国内の6分の1というメキシコの労賃の安さの魅力も手伝って、メキシコ商工省によると、1990年末現在、進出工場数は1785、雇用者数は約40万人にものぼる」(上島誠司「めざすは『北米の工場』:ルポ　メキシコのマキラドーラ」『朝日新聞』1991年3月17日7面)。

10　国際衛星版については、筆者がサンディエゴで収集した朝日新聞国際衛星版の切り抜き(コピー)に加えて、以下を参照。「朝日、読売が米で現地印刷:今秋に開始予定、来年春には日経も」『新聞協会報』1986年9月2日号1面;「活況の通信衛星版:欧米で現地印刷」『新聞研究往来』1986年9月8日号1面;麻生雍一郎「特化した情報をニュースレターで」

『新聞経営』117（1991）P. 14 - 16.

11　母親Oとのインタビューのトランスクリプトからである図1の012行から013行部分をさす。以下同様。

12　国際放送局は、international channel の訳である。KSCIは、日本語のほか、中国語・韓国語・ロシア語・アラビア語などの言語の番組を放送している。

13　『スーパータイム』については、以下を参照。河合徹「虹の目標に向かって：フジテレビの海外向け情報発信」『新聞経営』117（1991）P. 33 - 35.

14　サンディエゴのケーブルテレビについて、筆者の経験を基盤に紹介するが、三上（1991；1993）；後藤（1993）も参考にした。筆者は1994年1月までサンディエゴに滞在したが、筆者が住んでいた地区のケーブルテレビ会社は、Southwestern Cable TV である。

15　1993年には、サンディエゴに日本のスーパー、ヤオハンが進出し、店内に旭屋書店が出店した。それまでの小さな書店に比べて品揃えも豊富で、週末は人であふれていた。

16　先に英語を母語とする男性を配偶者とするのは3人と述べたが、あとの1人は日本生まれで11歳の時に、アメリカ人と再婚する母親と一緒にアメリカに渡り、そこで大学まで教育を受けた例である（Rの夫）。この男性は日本語の日常会話は不自由ないようだが、読み書きは少し苦労するようだ。夫人であるRとは、2年間の東京滞在中に知り合って結婚している。

17　ESM については、本稿 p.122 - 123 頁参照。

18　Rosengrenは「メディア使用」は2通りのやり方で概念化されうる（”may be conceptualized in two quite different ways”（1994b：53））と言っているが、彼の関心は明らかにデータ収集法にある。集められているデータの性質から「習慣的」と「実際の」メディア使用を区別されるべきだと主張しているのである。

19　振り返って考えてみて、なぜこれら5人の母親にあまりつっこんで聞かなかったのか不思議である。当時は、これらの人々は英語に関しては

不自由なく、メディア使用も英語のものに重点があると無自覚的に前提していたのかもしれない。あるいは、何かの遠慮みたいなものがあったのかもしれない。

20　Fとのインタビューは、1990年12月18日に行われた。FとJは、サンディエゴの南部地区に居住している。Jとのインタビューは、1991年1月7日に行ったが、Jは、「この1月3日から日本語放送が入るようになった」と話していた。両家庭のケーブルテレビ会社が同じかどうかはわからないが、F家の地域にも年明けから日本語放送が入るようになった可能性は高い。

Fの場合は、地域のケーブルテレビ会社がKSCIをそのチャンネルに加えていなかったのだが、Cが「ケーブルがなかったんですね、前のうちは」と言うのは違う理由と思われる。Cが以前住んでいた地域のケーブルテレビ会社はKSCIを放送していたが、Cが借りていた家にケーブルがひかれていなかったということのようである。家主が配線工事をしていなければ、当然ケーブルテレビは視聴できない。

21　筆者がここでしているような議論も、「ドラマ」概念が、文化相対的なものであることを反映したものかもしれない。この部分を書いてから、日米のテレビ番組に詳しいJohn Ratliff氏と、議論する機会があった。その時、氏は「シトコム」を「ドラマ」の一種とみなしたのだが、これには筆者は若干驚いた。また、テレビ番組の制作の形態が日米で大きく異なる点などの制度的差異を指摘され、日米のテレビ番組の比較などという大きなテーマを軽々しく論ずべきではないと痛感した次第である。

22　インタビューに先立ち、みなと学園の小学1・3・5年生の各1クラスの授業を半日観察し、そのクラスの児童を通じて母親へのインタビュー依頼を配布した。なお、3学年とも20名前後の学級が3クラスずつあったが、そのうちの1クラスを調査対象とした。

23　おもしろいのは、子供たちが同性同士で仲良くなるので、母親たちも男の子の母親同士、女の子の母親同士で友達になっていることである。

24　住居の広さがこのような交流を可能としている。サンディエゴでは、

リビングルームが最低でも10畳はあり、小さなホームパーティーには十分の広さである。以下で述べる、グループで集まっての習い事のスペースとしても不足はない。

25　「トール（tole）」：エナメルまたはラッカーを塗り、通例金めっき装飾を施した金属製品。盆・ランプのかさなどに用いる（『小学館ランダムハウス英和大辞典』）。

26　注2でも述べたように、「異文化」での生活へ「なじんでいく」という「過程」をどのような言葉で呼ぶかは大問題である。一般的には、「適応（adaptation）」という用語がよく使われているようだが、あえて本稿では、これの使用を避ける。

27　母親たちとのインタビューの始めのほうで学歴をたずねたのだが、大学や短大卒という人には、専攻も聞いた。その時に、英語・英文学、米文学などを専攻した人は、若干恥ずかしそうにこたえることが多かった。「そのわりに英語が使えない」という思いが心の底にあるようだ。

ここでは詳述できないが、相対的には、英語を勉強した人が、駐在員の夫人としてアメリカに来ているということが多いと思われる。海外駐在の可能性がある男性と結ばれるのは、英語に興味があり、それを勉強した女性が多いようである。

28　会話力が、読み・書き力と密接に結びついていることはいうまでもない。しかし、この簡明な事実が、日本では案外意識されていないような気がする。筆者がこのことに気がついたのは、アメリカに行ってしばらくしてからのことである。

29　アメリカの義務教育は5歳からで、小学1年生の前に1年間「幼稚園（kindergarten）」という課程に通うことになっている。「幼稚園」課程は小学校に併設されており、「学校（school）」の一部を成している。プレスクール（preschool）は、この「学校」入学以前に行くところである。日米の幼児教育制度について詳しくは、以下を参照：Boocock（1989）；Tobin et al.（1989）。

30　江淵は、就学形態の違いにもとづいて海外子女の異文化接触を「北米

型」と「アジア型」とに分けている（江淵 1983：14 - 25）。しかし、各状況での個人差という要因は残念ながら考慮されていない。

文　献

Boocock, S. S. 1989. Controlled diversity：An overview of the Japanese preschool system. *Journal of Japanese Studies* 15：41-65.

Boorstin, Daniel. 1962. *The image：Or, what happened to the American dream.* Atheneum. = 1964. 星野郁美・後藤和彦訳『幻影の時代：マスコミが製造する事実』東京創元社.

Cicourel, Aaron V. 1964. *Method and measurement in sociology.* Free Press. =1981. 下田直春監訳『社会学の方法と測定』新泉社.

Csikszentmihalyi, Mihaly & Kubey, Robert. 1981. Television and the rest of life：A systematic comparison of subjective experience. *Public Opinion Quarterly* 45：317-328.

Davis, Dennis K. & Baran, Stanley J. 1981. *Mass communication and everyday life：A perspective on theory and effects.* Wadsworth. = 1994. 山中正剛・武市英雄監訳『マス・コミュニケーションの空間：批判的研究のパースペクティブ』松籟社.

江淵　一公. 1980.「子どもたちの異文化接触」. 祖父江孝男編『日本人の構造（現代のエスプリ別冊）』所収 P. 151 - 174. 至文堂.

_____. 1983.「子どもたちの異文化接触」. 小林哲也編『異文化に育つ子どもたち』所収 P. 2 - 28. 有斐閣.

Embree, John F. 1939. *Suye mura：A Japanese village.* University of Chicago Press. = 1955. 植村元覚訳『日本の村落社会：須恵村』関書院.

Gergen, Kenneth J. 1991. *The saturated self：Dilemmas of identity in contemporary life.* New York：Basic Books.

後藤　和彦. 1974.「情報環境の特質」. 内川芳美他編『情報社会』（講座現代の社会とコミュニケーション2）所収 P. 155 - 175. 東京大学出版会.

後藤　将之. 1993.「コベントリー・ケーブル」. 東京大学社会情報研究所編

『多チャンネル化と視聴行動：日本・アメリカ・イギリスのCATV加入者の研究』所収 P. 75 - 85. 東京大学出版会.

林　茂樹. 1989.「現代生活の情報環境」. 美ノ谷和成編『日常生活のマス・メディア』所収 P. 1 - 22. 中央大学出版部.

海外子女教育振興財団編. 1990.『海外子女教育施設便覧　第2巻　補習授業校編』海外子女教育振興財団.

加藤　春恵子他編. 1992.『女性とメディア』世界思想社.

加藤　秀俊. 1972.『情報行動』中央公論社.

川本　勝. 1990.「メディア構造の変動と社会生活」. 竹内郁郎他編『ニューメディアと社会生活』所収 P. 3 - 19. 東京大学出版会.

北村　日出夫. 1970.『情報行動論：人間にとって情報とは何か』誠文堂新光社.

京都大学教育学部比較教育学研究室. 1979.『日本人児童の適応と学習：マニラ・シンガポールにおける在外日本人コミュニティとその子弟の教育に関する調査報告』.

三上　俊治. 1990.「ニューメディアと情報行動」. 竹内郁郎他編『ニューメディアと社会生活』所収 P. 97 - 117. 東京大学出版会.

_____. 1991.『情報環境とニューメディア』学文社.

_____. 1993.「メディア・ジェネラル」. 東京大学社会情報研究所編『多チャンネル化と視聴行動：日本・アメリカ・イギリスのCATV加入者の研究』所収 P. 65 - 73. 東京大学出版会.

Minami, Yasusuke. 1993. Growing up in two cultures : The educational experiences of Japanese students in America and their return to Japan. Ph.D. diss., University of California, San Diego.

_____. 1995. Trans-cultural development and shadowing.『コミュニケーション紀要』第9輯 P. 145 - 159.

南　保輔. 1995a.「A. V. シクレルの方法論の展開」. 船津衛・宝月誠編『シンボリック相互作用論の世界』所収. 恒星社厚生閣.

_____. 1995b.「教室での相互作用」. 船津衛・宝月誠編『シンボリック相

互作用論の世界』所収．恒星社厚生閣．

Minoura, Yasuko. 1979. Life in-between : The acquisition of cultural identity among Japanese children living in the United States. Ph.D. diss., University of California, Los Angeles.

箕浦　康子．1984.『子どもの異文化体験：人格形成過程の心理人類学的研究』思索社．

_____. 1990.『文化のなかの子ども』東京大学出版会．

水野　博介．1990.「ニューメディアと家庭生活」．竹内郁郎他編『ニューメディアと社会生活』所収 P. 45 - 67. 東京大学出版会．

文部省．1991.『海外子女教育の現状』．

ムトー　ヒロコ．1985.『妻たちの海外駐在』文藝春秋．

中野　収．1980.『現代人の情報行動』日本放送出版協会．

Rosengren, Karl Erik. Ed. 1994. *Media effects and beyond : Culture, socialization and lifestyles.* London : Routledge.

_____. 1994a. Sweden and its media scene, 1945 - 90 : A bird' s-eye view. In Rosengren, K. E. Ed. P. 29 - 38.

_____. 1994b. Media use under structural change. In Rosengren, K. E. Ed. P. 49 - 75.

柴野　昌山．1983.「海外日本人コミュニティとその教育問題」．小林哲也編『異文化に育つ子どもたち』所収 P. 86 - 107. 有斐閣．

篠田　有子．1984.『母と子のアメリカ：幼児教育の未来をさぐる』中央公論社．

Smith, Robert J. & Wiswell, Ella Lury. 1982. *The women of Sue-mura 1935-36.* Chicago : University of Chicago Press. = 1987. 河村望・斎藤尚文訳『須恵村の女たち：暮しの民俗誌』御茶の水書房．

炭谷　晃男．1989.「生活の中のマス・メディア」．美ノ谷和成編『日常生活のマス・メディア』所収 P. 23 - 46. 中央大学出版部．

田所　泉．1974.「マス・メディア環境」．内川芳美他編『情報社会』（講座現代の社会とコミュニケーション2）所収 P. 99 - 119. 東京大学出版会．

竹下　俊郎．1990．「ニューメディアと地域生活：CATVを中心として」．竹内郁郎他編『ニューメディアと社会生活』所収 P. 21 - 44．東京大学出版会．

Tobin, Joseph J., Wu, D. Y. H. & Davidson, D. H. 1989. *Preschool in three cultures : Japan, China, and the United States.* New Haven : Yale University Press.

戸村　栄子．1991a．「ホームビデオの利用実態」．『放送研究と調査』4月号 P. 97 - 117.

_____．1991b．「データにみる80年代のテレビ視聴動向　その3：ニューメディアとテレビ視聴」．『放送研究と調査』9月号 P. 44 - 51.

辻村　明．1968．『日本文化とコミュニケーション』日本放送出版協会．

上野　千鶴子．1988．『「女縁」が世の中を変える』日本経済新聞社．

U. S. Department of Commerce, Bureau of the Census. Ed. 1992. *Statistical abstract of the United States.* 112th ed. = 1993. 鳥居泰彦監訳『現代アメリカデータ総覧』原書房．

Vera, A. H. & Simon, H. A. 1993. Situated action : A symbolic interpretation. *Cognitive Science* 17 : 7 - 48.

_____. 1995. A theoretical evaluation of the situated cognition approach. 『認知科学』2：5 - 15.

Wertsch, J. V. 1985. The semiotic mediation of mental life : L. S. Vygotsky and M. M. Bakhtin. In Mertz, E. & Parmentier, R. J. Eds. *Semiotic mediation : Sociocultural and psychological perspectives.* Academic Press. P. 49 - 71.

Yin, R. K. 1988. *Case study research : Design and methods.* Newbury Park : Sage.

吉田　民人．1990．『自己組織性の情報科学：エヴォルーショニストのウィーナー的自然観』新曜社．

付図A—S. 母親とのインタビューのトランスクリプト

インタビューは一組を除いて（H・Zとは、勤務先の研究所で会う）、サンディエゴでの母親の住居で南により日本語で行われた。インタビュー用の質問は、子供の状況に関するものが中心であったが（項目の一覧は、Minami（1993: 480-482）を参照）、母親自身の生活もとりあげられた。ここでは、メディア使用やつきあいに関する部分のうちの一部を掲載する。なお、子供の学年は、インタビュー時の日本の学校制度における学年である（アメリカの現地校では、年齢と学年とが厳密に一対一対応をしていない）。

行番号が不連続のところは、その間に、別のやりとりがあったことを示している。基本的に、発話に忠実に録音テープより起こしたが、内容とはあまり関係ない、相槌などは省略したものもある。順番取り分析などは想定していない。なお、トランスクリプト作成については、南（1995b）を参照せよ。

凡　例

ｘｘ：聞き取り不能の発話部分。xの数でその（相対的）長短を示す。

下線：強調を示す。ゆっくりとした、あるいは、強勢のある発話。

（ ）：身ぶりや動作などを示す。沈黙を示す場合は、目立つもののみ。

［ ］：南による内容についての注。

本文での引用は、たとえば、（A001 - A003）と表記する。この場合、付表Aの001行から003行を示す。

付図A. 母親Aとのインタビュー

1991年1月8日

長女　小学3年生；　次女　小学2年生；　三女　4歳

A001　南：いらっしゃってから、英語のコースとかお取りになられましたか。

A002　A：アダルトスクールいうのがあるんですけど、それを去年の夏ぐらいから行

A003　　ってるんです。それまで、あの子がずっといえにいましたので（そばにい

A004　　る三女を指しながら）、プリスクールいれるようになってから、アダルトス

A005　　クールへ行ってます。週に1回、あの、家庭教師みたいなんを来ていただい

A006　　て、教えてもらってるんですけど。

A007　南：それは、お子さん用にじゃなくて、お母さん。

A008　A：わたし用に。でも、なかなか、やっぱし、若いときに英語の時間があれだ

A009　　けあって、覚えてないのを、いま、こっち来たから、いくらこちらのかた

A010　に教えてもらっても、あの、忘れるほうが早くて、あんまり、モノにならないいうことがわかりましたけど、最近では
A011

A101　A：わたしもこちらへ来たら、もう来たら、もう、1年おるだけで、もう英語が
A102　全部話せるようなるんだろうと、勝手に想像してたんですけど。でも、とて
A103　も、もう、とても及ばない（笑い）。

A201　南：学校の先生とのカンファレンスなんかは、あの、お一人でいらっしゃるん
A202　ですか、お父さまもご一緒に。
A203　A：わたしは前の時は、わたしの家庭教師と一緒に行っていただいて、ほんで、
A204　いろいろ聞いてもらって、帰ってきてから、ゆっくり説明してもらったんで
A205　す。二人、二人先生がおって、一人のほうの先生は、もう普通の、話し方で、
A206　速くおっしゃったから、もうほとんど聞き取れなかったです。もう一人の先
A207　生のほうは、あの、ゆっくりとおっしゃったんです、わたしに話するように。
A208　もう一人のかたは、わたしの家庭教師に話をしたんです。もう一人の先生は、
A209　わたしに、ゆっくりはなししたから、まあ、半分ぐらいは、わかりましたけ
A210　ど。
A211　南：学校からの配布物なんかもじゃあ、お母さんがご自分でお読みに、ゆっく
A212　りお読みになられるという、かんじですか。
A213　A：そう、時間かけて、辞書を引いて。はじめはたいへんでしたけども、この頃
A214　は、あの題だけ読んで、あ、もう大体こんなこと書いてあると思ったら、も
A215　うほとんど重要でないのが多いから、もう題だけ読んで捨ててるんです。こ
A216　れは、重要だなあと思ったら、わたし、ほとんど家庭教師のかたにお願いし
A217　たり、それからわりと、ボランティアのかたがあるんです。日本人、半分日
A218　本人で、半分こちらのかたゆう、あのこちらのかたと結婚されたとかね、そ
A219　ういうかたが、ボランティアなさってて、そのかたに電話するんです。
A220　南：ほう。あ、それは、学校の、ボランティアなんですか。
A221　A：そうです。だから、そのかたに、わからへんこと電話したら、あの教えてい
A222　ただけるし、もしわからへんなかったら、そのかたも学校へ連絡して、もっ
A223　と詳しく教えていただけるんです。わりと、ここ、日本人が多いから、そん
A224　なに英語必要じゃないんです。その仲介のかたがたくさんいらっしゃって。
A225　病院行っても、あのシャープ［病院の名前。日本の家電メーカーとは無関係］
A226　に、日本語サービスがありますし。もう、ほんと日本語だけでも、いけます
A227　ねえ（笑い）。

A228 南：あ、そうですか。そうしますと、わりと普段のおつきあいは、そういう日
A229 本人のかたと多いですか、あの、お母様の。
A230 A：そうですねえ、日本人のかたが多いと思います。
A231 南：あ、そうですか。それは、あのAA［Aの夫が勤務している日本企業名］の
A232 かたが多いですか。
A233 A：いえ、そうとは限らないですね。やっぱし、あのアダルトスクール行って、
A234 知り合うとか。ここらへんのかたはみんな働いておられるんです。いえで、
A235 わたしみたいにポーといる人はないの違いますか、この近所。だから、
A236 土・日だけだから、土・日もみんな忙しそうで、ゆっくりこう話する人が
A237 ないですねえ、こう出会った時に、ちょっとあいさつするぐらいで、ゆっ
A238 くり話する人は少ないですねえ。
A239 南：あ、そうですか。なにか、英語習ってらっしゃるほかに、趣味とか。よく、
A240 トールペイントなんか、日本人のお母様方の間で人気あるみたいですけど、
A241 なんかやってらっしゃいますか。
A242 A：あー、そうですね。特にしてないんです（笑い）。だいたい暇な時は、午前
A243 中はアダルトスクール行って、それからもう午後になったらこの子がいま
A244 すし。その二人の子どもが帰ってきたら、その二人に勉強さすのに、それ
A245 が一番大きなわたしの仕事です（笑い）。それで、あんまりなんかしても、
A246 いえで予習や復習ができないから。トールペイントもだいぶいえで宿題が
A247 あるらしいです。
A248 南：あ、そうなんですか、ほう。あの、新聞は、なにか取ってらっしゃいます
A249 か。
A250 A：主人が、毎日かな、朝日かな。
A251 南：あ、こちらにお取りになってる。オフィスのほうに。
A252 A：いえ、こちらに、郵便で。
A253 南：あ、そうですか。あの、英語のは、じゃあお取りになってないですか。
A254 A：取ってないです。
A255 南：あ、そうですか。あの、テレビは、こちら、日本語放送はいるんですか。
A256 A：ええ、はいります。
A257 南：あ、そうですか。じゃあ、毎朝ニュースはご覧になってますか。
A258 A：主人は、行く前に5分ほど見てますね。ほかの日はほとんどもうテレビをか
A259 けないです。土・日に、主人が休みの日にかけるぐらいで、そのときに家
A260 族はちょっと見るぐらいですね。普段はもう全然。

付図G. 母親E・Gとのインタビュー

1990年12月24日（Gの住居にて）

E：長男　小学5年生；　長女　小学3年生

G：長男　中学2年生；　長女　小学3年生

G001 南：あの、現在は、そうしますと、特に英語、不自由感じてらっしゃらないで
G002 すか。
G003 G：（笑いながら）いや、不自由じゃないことはないですけど、ええ。
G004 南：あの、学校の先生とのコミュニケーション、ていうかそういうのは、大体
G005 ごじぶ、お一人で、特にお父さんの、ご主人の。
G006 G：あ、
G007 E：お父様より、こちら、お母様のほうが、もう、堪能でらっしゃいますから。
G008 G：学校。あ、学校の先生とコミュニケーション、あっ、その程度のことは別
G009 に苦労には思わないんです。
G010 南：あ、そうですか。あの、おつきあいは、あの、現地のかたとも、ありますか。
G011
G012 G：わたしはね、日本語でもあんまり、大人しいほうなんであれなんですけど。
G013 E：は、はは。
G014 G：（笑いながら）そういうおつきあいは、こちら（E）のほうがなさってると
G015 思いますけど。
G016 南：あ、そうですか。あの、ご趣味とかは。何か、あの。
G017 G：趣味はですね、映画を見たり、
G018 南：あの、パッチワークとか、
G019 G：xx（聞き取り不能の短い発話）
G020 南：よくお母様とかと。
G021 E：（笑い）
G022 G：あんまりそういうのは、手先が器用ではないので、
G023 E：xxいえいえ、器用ですよ。
G024 G：いえ。あの、ミシン見ると、あの、
G025 南：はい。
G026 G：さっと、あの、何だっけ。
G027 E：鳥肌（笑い）。
G028 G：鳥肌がたっちゃうほうですから（笑い）。でも、一緒に、あの、なんか、ト
G029 ールペイントのクラスはご一緒に取ったことがあって、そういうのが続い
G030 たんです。

G031 南：あ、そうですか。なんか、あのう、熱心なかたは熱心に、日本人のお母さ
G032 んでもやってらっしゃるかたが多いらしいですけど。
G033 G：ああ、そうですね。やっぱり、なにか、あとに残るのがあってもいいかな
G034 あと思ってやってるんですけど。
G035 南：あのう、テレビとかラジオとかは、英語のものと日本語のものと、いかが
G036 ですか。
G037 G：朝のニュースは日本語のニュース見ますけど。(2秒) 土、土・日も好きな
G038 のは1コぐらい見ますけど、普段はだってほかにないから、ええ。
G039 E：ないですよね。
G040 G：ええ、こっちのドラマを見てますけど。
G041 南：ああ、そうですか。新聞なんかは、あの、日本語のものを取ってらっしゃ
G042 いますか。
G043 G：ええ、GA［Gの夫が勤務している日本企業名］で取っているのを、GAのか
G044 たで回覧するので、ぱっと見てぱっと回す程度ですね。
G045 南：ああ、そうですか。じゃあ、こちらのも取って。
G046 G：こっちは、二つ取ってます。
G047 南：ああ、そうですか。あの、ニューヨークタイムズとか。
G048 G：いや、そういうのじゃなくて。
G049 南：あ、ウォールストリートジャーナルとか。
G050 G：そ、あ、それは主人が会社で取って、家で取ってんのはだって、ロサンジ
G051 ェルスタイムズとサンディエゴユニオンと。
G052 南：あ、なるほど。結構、ご覧になってますか。
G053 G：一応目は通しますけども。
G054 南：あ、そうですか。

付図N. 母親Nとのインタビュー

1991年1月18日

長男　小学5年生；　次男（NB）　小学3年生；　三男（NE）　3歳

N001 南：現在、あの、お母様は、たとえば、学校の先生との交渉とかで、英語を、
N002 まあ、なんとかっていうか、不自由なく。
N003 N：不自由はありますけど、そりゃ、もう、どうでもいいことはもちろんあれ
N004 しないんですけども、絶対これだけは必要だっていうときは、もう単語を
N005 並べてでもなんか。そうしないと、しかたないですものね。

N006 南：その、とくにご主人と一緒に行っていただくとか。
N007 N：もちろん、あのカンファレンスには、主人も、もう時間も決まりますでし
N008 ょ、あれは、あのもらえるし、スケジュールを。そういう時は、必ず行っ
N009 てもらってます、いままで。ただ、ちょっとしたこととか、あんまり主人
N010 をわずらわしたくない時は、うーん、一人で行ってますねえ、通じてるん
N011 でしょうか（笑い）。とにかく英語の勉強、とくにこちらで短期でいらして
N012 るかた、まあ、お友達も何人かいらして、お聞きしたりすると、あの、子
N013 供さんにチューターをつけていて、そのついでに自分もというかたいらっ
N014 しゃいますよね。だから、ほんとうに、そういうふうにすれば、自分も上
N015 手になるんだろうなあと思うのに、なんか、それはしてないんですけど。
N016 まあ、なんか、それでもなんとなくやっていけてるなあというのがあるん
N017 でしょうか。ほんとうに、だけど、ああ、言いたいのに言えないっていう
N018 時ありますよね。

N101 南：あの、お母様の現在のおつきあいは、あの、アメリカ人と日本人とどちら
N102 が多いですか。
N103 N：あ、そりゃ、日本人が多いですよねえ、多いのは。
N104 南：あの、それは、どういう関係の、NA［Nの夫の勤務している日本企業名］
N105 のかたとか、同級生のお母さんとか。
N106 N：そうですね、ええ。
N107 南：じゃあ、みなと［学園］の、同級生の。
N108 N：そうですね、みなとの同級生とか。まあ、そんなに広くないですけどね、
N109 限られてはいますけれど、そうですね、日本人のかた。あと、会社関係の
N110 奥様方ですね。そんなかんじですけど。
N111 南：あの、アメリカ人のかたとは。
N112 N：あ、アメリカでは、あのう、お友達といっていうか、まあ、隣り、すごく
N113 親しくしてもらってるんですけどね。あと、NB［次男］のお友達のお母さ
N114 ん、まあ、NC［次男が通っている現地の小学校］のPTA会長してたりとか。
N115 あと、そうですね、うんお友達、あ、それで、そのアパート時代のお友達
N116 とは、まあいまも。だけど、あたしが子供が生まれない時は、まだね、よ
N117 くいききできても、生まれて、彼女に子供がいなかったりすると、あの、
N118 あれで、まあ、1年に2・3べん会うかそんなかんじですか。それでも、もう、
N119 10何年続いてますからねえ。だから、ほんとうの、そりゃ、お話は、する
N120 ことはあっても、お友達、ただ知り合い（笑い）。だけど、この、ここ入る

N121　時、ゲートがありましたでしょう。だから、なんか、ここの中は、なんな
N122　く、あのう、みなさんどなたでもっていうかんじはありますけどね。
N123　南：あの、学校に、NCには、よくヘルプとかいらっしゃってますか。
N124　N：あ、行ってないんです。これが、行ったことがないんです、わたくし。ヘ
N125　ルプしたことないんです、いままで。あ、もちろんドライブとか、そうい
N126　うのは行って。ほかのかた、あのう、お聞きになっていらして、あのう、
N127　いろいろ行かれてらっしゃるでしょう。
N128　南：行かれてらっしゃるかたもいらっしゃいますね。
N129　N：ええ、なんか。あのう、ときどき、ライブラリーに行っても、日本人らし
N130　き人が、いつも行ってらっしゃるみたいだし。なんか、いろいろあれなん
N131　ですか。あたしの場合は、子供が、こうちょっと離れて生まれてますでし
N132　ょ。下の子がやっと、いま3歳ですから。そうなので、ヘルプはしてないで
N133　すよね。そして、いま、できるかなあと思っても、やっぱり、あのう、午
N134　後に欲しいとかですね、そのヘルプが。だったりすると、また、その、午
N135　後には行けないなとかですね。で、また、案外キンダーとか、1年、2年っ
N136　て、そういう頃は、ね、ヘルプ下さいという、クラスもあるみたいですけ
N137　ど、もう上になるとないですからね。だけど、あの、もうなるべく、あの
N138　う、何か持ってきて下さい、あのう、とか、あのう、ドライブして下さい
N139　とか、そういうのは、もう、できる限りヘルプしてます。
N140　南：あ、そうですか。
N141　N：ええ、できる範囲で。ドライブは好きなもんですから（笑い）。
N142　南：あ、そうですか。あのう、お母様の趣味とか何か、あの、日本人のお母様
N143　で、トールペイントとか、刺繍とか、パッチワークとか、そういう。
N144　N：ああ、あたしは、まあ、いままで申しましたように、あのう、子育てがや
N145　っと終わりまして、そのう、下の子をいま幼稚園に入れて、いまやってる
N146　のが、そのう、頭を使わないで（笑いながら）、あのう、テニスと、それか
N147　ら、ほんとに昨日初めてゴルフを始めたんです。これから、その二本で行
N148　こうと思ってるんです。
N149　南：あ、そうですか。ゴルフはご主人もなさるんですか。
N150　N：主人は、ずうっとしてるんですけどね。
N151　南：テニスは、そういうチームとかに入って、ていうかんじですか。あるいは、
N152　N：テニスは、あの、ND［付近のコミュニティカレッジ］に、あの、レッスン
N153　をテイクして、あの、取ってます。それと、あと、個人的にも、あの、習
N154　ってるんですね、プライベートレッスンていうか。だから、xxxxx、ここ、

N155　去年、なんか、ひとつやりだしたら、なんか、もう、いつもやっていたい
N156　っていう（笑い）。
N157　南：ああ、なるほど。
N158　N：あのう、結婚する前は、テニスしてたんですけどね。もう、ずうっとでき
N159　ないで、うっぷんが、うわっと、一斉に（笑い）。
N160　南：ああ、なるほど。（5秒）あのう、テレビは、毎朝のニュースは、よく、あ
N161　の、日本のニュースは。
N162　N：日本語は、見るんですよね。
N163　南：あと、土・日の日本語放送も。
N164　N：そうです、日本語放送は、欠かさず見ますね（笑い）。
N165　南：あ、そうですか。あの、英語のものは、いかがですか。
N166　N：英語のものは、ほとんど。まあ、いまは、あのニュースは見ますけどね、
N167　あの、湾岸情勢で。だけど、うーん、なんか、大きなことがあったら、ニ
N168　ュース見るんですけど。とにかく、テレビつけたら、子供が勉強に集中し
N169　ないとか思って、もう、全然見ませんね。
N170　南：ああ、そうですか。
N171　N：ええ。だから、あたしはわからなくて、必死で見るんですけど、子供なん
N172　か、ただ流れてるだけで耳に入るわけでしょ。もう、注意散漫になるんで
N173　すよね。だから、テレビは、見ないですね。
N174　南：ああ。（2秒）あの、ディズニーチャンネルとかはとってらっしゃいますか。
N175　N：いいえ、とってないです、ディズニーは。
N176　南：新聞は、日本語のもの取ってらっしゃいますか。
N177　N：そうなんです、羅府新報だけです。アメリカののも、あの、リポートがあ
N178　ったりして、取ろうとかいいながら、なかなか、もう、ちょこちょこ買っ
N179　たりぐらいですまして。もう、安いものですからね、取ればいいんでしょ
N180　うけどね。クーポンも入ってるし（笑い）。
N181　南：ああ、そうですね。あのう、日本語の雑誌とか、何か。
N182　N：あ、日本語の雑誌はですね。あ、子供たち、『小学生』とか、あれ、3人取
N183　ってますね。わたくしは、いまのところ取ってないです。それで、あと、
N184　あのう、会社のほうでこう本を、あの、こういう本があるけどどうか、っ
N185　ていうのが、あのう、そうですね、1カ月に1ぺんぐらいまわってくるんで
N186　しょうか。そんなの、いいのがあったら、ときどき、買って、あれします
N187　けど。あと、みなとで借りれますからね。あれを借りて。フリーですから、
N188　なんせ（笑い）。

付図S. 母親Sとのインタビュー

1991年1月25日

長男　小学3年生

S001 南：あのう、現在、じゃ、は、もうちょっと、そしたら、に、あのう、SA［Sの姓］くんがみなと学園に行くようになられて、逆に日本人とのおつきあいが、
S002
S003

S004 S：そうですね。やっぱり、みなと学園関係が、ありますからねえ。増えましたねえ、ええ。
S005

S006 南：この、付近では、日本人は、あんまり住んでらっしゃらないですか。

S007 S：いえ。そこの、4軒、はす向かいですか。

S008 南：はい。

S009 S：そこに、日本人、のか、そのかたは、ご主人はネイビーでね。で、奥さんが日本人。しかし、もう、彼女の息子さんっていうのはみんな大きくて、成人しちゃって、
S010
S011

S012 南：ああ、なるほど。

S013 S：老夫婦二人だけ、そこに住んでるんですね。

S014 南：ああ、そうですか。じゃあ、そのかたとは、わりと仲良く、

S015 S：おんなじ、あのう、うちキャソリックなんですねえ。

S016 南：はあ、はあ。

S017 S：それで、彼女たちもキャソリックだから、そういう関係で、まあ親しいですね。
S018

S019 南：ああ、そうですか。その、お母様は、キリスト教は、こちらに。結婚なさってから、
S020

S021 S：いえ、わたしの、あの、わたし京都なんですけど、あのう、京都で中学校・高校は、あの、キャソリックの学校に行きましたし、
S022

S023 南：ああ、そうなんですか。でも、あ、キャソリックは洗礼とかないですね。

S024 S：ありますね。だから、あたし洗礼受けてます。

S025 南：ああ、日本でですか。

S026 S：はい、はい。

S027 南：ああ、そうですか。ほう。じゃあ、そういう意味で、そのう、宗教的な面でもアメリカへの憧れみたいなものが強くあったんですか。
S028

S029 S：まあ、（それほどではないというかのように）まあなんていうんで、おんなじキリスト教国というんですかね、あのう。だから、そういうなんで、別に、あの、ひどく、こう違和感っていうのはなかったかんじはありますね。それ
S030
S031

S032　で、逆にここに初めて来たときも、教会っていうのがずいぶん支えになり
S033　ましたね。最初に来たとき、も、やっぱり、あのう、教会に行って、その
S034　時ルームメイトなんかも知り合った、ずっと、学生時代ね、アメリカ人の
S035　女の子と一緒に住んだ。
S036　南：ええ、はい。
S037　S：その子も教会で知り合ってね。だから、教会関係の、その時は、友達ってい
S038　うのは多かったですね。で、いまの主人とも、教会で結局知りあったんです。
S039　南：ああ、なるほど、はあ。じゃあ、いまも、毎週欠かさず礼拝には行ってら
S040　っしゃってますか。
S041　S：ええ、毎週日曜日行ってます。
S042　南：SB［長男の名］くんも行ってらっしゃるんですか。
S043　S：そうです。それで、うちの、あの、アメリカの、彼のアメリカの学校は、キ
S044　ャソリックの、プライベートスクールに行ってます。
S045　南：ああ、そうですか。
S046　S：はい。
S047　南：じゃあ、ちょっと、遠い。
S048　S：そうなんです。あのう、サンディエゴのステート［州立大学］いうのご存じ
S049　ですか。
S050　南：はい。
S051　S：ジャックマーフィー［野球場］ね。あそこの裏側の、あっちのほう。
S052　南：ああ、そうですか。それは、じゃあ、お母さん毎日送り迎えされるわけで
S053　すか。
S054　S：朝、主人が、仕事の行きに連れていって、それでわたしが3時に迎えに行くと。
S055　南：ああ、そうですか。
S056　S：はい。
S057　南：ああ、そうですか。（3秒）あのう、まあ、英語に関しては、お母様は、と
S058　くにその不自由っていうか、最近なさることは、
S059　S：まあ、不自由っていうことはないですねえ。
S060　南：ああ、そうですか。
S061　S：もう、そーと、込み入ってむつかしいことになったら、ね、そりゃ、主人に、
S062　ちょっと助けをいいますけど。普通の日常で、さしあたって不便ということ
S063　はありませんねえ。
S064　南：ああ、そうですか。じゃあ、その、学校の先生との、カンファレンスなん
S065　かも、もちろん、お母さんお一人でいら、

S066 S：いや、もう主人も行くんです。主人は、もううちは、一生懸命なってますか
S067 ら（笑い）。
S068 南：ああ、そうですか。
S069 S：どういう具合にやってるかって。
S070 南：教育熱心で。
S071 S：そうです。だから、出て行きます。はい。
S072 南：ああ、そうですか。へえ。あの、お母様、趣味とか、ピアノとか習ってら
S073 っしゃるんですか。
S074 S：いや、これ［部屋にピアノが置いてある］は息子なんです。わたしもちょっ
S075 とやってたんですけどね。もう、あたしはやめちゃって、息子はまだやって
S076 ますけど。
S077 南：ああ、そうですか。あの、日本人のお母さんなんかだと、キルトとかパッ
S078 チワークとか、トールペイントとか。
S079 S：ああ、そういうのは、多いですねえ。あたしも、あの、キルトもしてたんで
S080 すけど、もうなんか、その目が悪くなってやめちゃって（笑い）。
S081 南：ああ、そうですか。じゃあ、とくに、いまは、趣味とか。
S082 S：そうですねえ。まあ、庭の、ことすんのが好きですねえ、野菜を作ったりね。
S083 野菜したり、花、つくったりね。
S084 南：はあ、はあ、はあ。ああ、そうですか。
S085 S：そういうなんは、好きですけどね。
S086 南：運動はなにかやってらっしゃいますか。
S087 S：運動は、あのう、なんていうんですか。普通の、柔軟体操っていうんですか。
S088 南：ああ、はい。
S089 S：ああいうなのに、週に2回ほど行ってますけどね。
S090 南：ああ、そうですか。
S091 S：はい。
S092 南：あの、じゃあ、あえて、その日本の新聞を取ってらっしゃりとか、するこ
S093 とはないですか。
S094 S：は、ないですねえ。ときたま、あの、Dさんとこが、あの、朝日を取ってら
S095 っしゃいますねえ。
S096 南：ええ、はい。
S097 S：だから、あそこから、古くなったのをもらったり、
S098 南：ええ。
S099 S：そういう程度で、日本の新聞は取ってませんねえ。

S100 南：ああ、そうですか。じゃあ、なにか、あの、雑誌かなんかは取ってらっし
S101 ゃいますか。
S102 S：ああ、友達、あっ、雑誌、わたし取ってます。『婦人公論』取ってます。
S103 南：あーあ、そうですか。へえ。あとは、あのう、じゃあ、新聞はこちらのも
S104 のを、
S105 S：を読む、まあ、それは毎日、来ますよね。それは、読みますし。で、あと、
S106 日本のは、ときたま週刊誌を友達がね、古いのを回してくれたり、その程度
S107 です。
S108 南：ああ、なるほど。テレビなんかは、いかがですか。
S109 S：あたしはテレビは、あんまり見ないんですねえ。日本のビデオも、もう全然
S110 見ませんし。
S111 南：ええ。
S112 S：見るのは、息子が日本のビデオをね。
S113 南：ああ、そうですか。
S114 S：あの、姉が送ってきますので。それを、息子は、もうしょっちゅう見てます
S115 ね。
S116 南：どういうのをご覧になってますか。
S117 S：もう、全部です（笑い）。姉は、あのう、毎週とってるんですね、月曜日か
S118 ら日曜日まで、その子供の番組ね。ピックアップしたのを。もう、定期的に
S119 送ってくるんです。
S120 南：ああ、そうですか。
S121 S：3週間に1回ぐらいとって、たまったのがね。だから、もうほとんど見てます。
S122 南：ああ、そうですか。でも、だいたい子供向けの漫画とか、
S123 S：そうですね。それから、NHKのなんですかねえ、『1・2・算数』とかあるで
S124 しょう。それから、
S125 南：ああ、教育番組。
S126 S：『3年生の理科』、とかね、そんなんもはいってます。
S127 南：ああ、そうですか。ほう、それは、やっぱり、あのう、お母さんが、送っ
S128 てちょうだいと、
S129 S：そうです。漫画ばっかりじゃ困るから。
S130 南：ああ、そうですか。へえ。
S131 S：ええ。